茨木市文化財資料集　第65集

松　ヶ　本　南　遺　跡
発　掘　調　査　報　告　書

－ 立命館大学大阪いばらきキャンパス建設に伴う発掘調査報告書－

平成27年（2015年）10月

茨木市教育委員会

はじめに

私たちが暮らしているこの茨木は、大阪と京都とのあいだに位置しており、北半分は丹波高原の老の坂山地の麓で、南半分には大阪平野の一部をなす三島平野がひろがり、温暖な気候と豊かな自然に恵まれた過ごしやすい環境の土地として、はるか昔から多くの人びとが生活してきました。その証として、人びとの生活した足跡は、土に埋もれた文化財として今に残されてきました。

このような先人たちの生活や文化は、現代の私たちの生活の根本となるものであり、また、土の中に残された遺構や遺物は、過去の人びとの生活を知る手がかりとなる貴重な文化遺産として、次代にのこし伝えていくべきものであります。

しかし、文化や生活はその時代ごとに移ろいでいき、本市においても同様に市のシンボルともいえる建造物や企業、商業施設などが移転し、その跡地に新たな市の魅力となる様々な開発が計画されています。そのひとつにＪＲ茨木駅に隣接するサッポロビール株式会社大阪工場跡地に、立命館大学大阪いばらきキャンパスが建設されることになりましたことは、本市にとりまして新たな文化の創造とにぎわいをもたらしてくれるものと大いに期待をよせております。

本報告書は、平成 24 年度に立命館大学大阪いばらきキャンパス建設のため、中条小学校遺跡および松ケ本南遺跡の発掘調査を実施した成果について、詳細を報告するものです。両遺跡からは、先人たちの生活を知るうえで貴重な遺構や遺物が数多く発見され、文化財の記録保存を行いました。さらに、広く一般に公開するために発掘調査中に現地説明会の開催や自然化学分析の実施、中条小学校遺跡で見つかった土坑剥ぎ取りを行い、立命館大学による遺構の保存を図るなど積極的で多大な協力のもと、無事、発掘調査を終了することができました。

終わりになりましたが、学校法人立命館をはじめ、調査にあたって惜しみないご協力をいただきました関係の皆さまに深く感謝するとともに、今後とも本市の埋蔵文化財の保護に一層の温かいご理解とお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

平成 27 年 10 月 31 日

茨木市教育委員会
教育長　　八　木　章　治

例　　言

１．本書は平成 24 年度に実施した茨木市岩倉町に所在する立命館大学大阪いばらきキャンパス建設に伴う松ケ本南遺跡（MTS12 － 1 ）の発掘調査報告書である。
２．現地における発掘調査は、学校法人 立命館の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導・助言を得て、平成 23 年度に試掘調査（平成 23 年 11 月 25 日～ 12 月 19 日）、平成 24 年度に発掘調査（平成 24 年 5 月 7 日～平成 25 年 3 月 15 日）を茨木市教育委員会が実施した。
３．発掘調査に対する業務は地域教育振興課文化振興係（現　社会教育振興課文化財係）が実施した。
発掘調査に関する協議・手続きおよび事務処理は上田哲平が担当した（平成 26 年 3 月 31 日まで）。
現地調査の担当は以下の通りである。
平成 23 年度　地域教育振興課調査員　中東正之
平成 24 年度　文化財資料館学芸員清水邦彦（平成 24 年 8 月 1 日～）・地域教育振興課嘱託調査員藤田徹也・同嘱託調査員中東正之・同嘱託調査員大向智子・同嘱託調査員富田卓見（～平成 24 年 6 月 14 日）
４．整理・報告書作成業務は平成 25 年度～ 27 年度にかけて各担当者が行った。本書の執筆は藤田が行い、編集については、木村健明、川村和子、正岡大実の協力を得て藤田が行った。
５．現地調査には、調査補助員石井恵子・上山篤志・大田年男・大坪啓子・大出暁雄・岡部裕樹・門井久登・神谷裕子・川畑康雄・地代広信・清水良真・須田佑子・高瀬隆治・滝口香菜子・辻本祐布子・中川夕香・野坂勇次郎・林　和子・藤井　脩・松沢　健・松政郁子・宮西貴史・山下哲也・吉田与喜一が従事し、整理作業は上記のほか柴田将幹・下口法子・初代絵里・高橋公子・西坂泰子・堀澤照美・和田惠津子が従事した。（五十音順）
６．現地調査及び本書の執筆に際しては、関係諸機関をはじめ以下の方々から多大な御教示を賜った。記して感謝の意を表する。
伊藤淳史・川上洋一・高　正龍・木立雅朗・木庭元晴・柴田将幹・重松伸司・白井忠雄・辻尾榮市・辻　康男・濱田延充・濱野俊一・菱田淳子・菱田哲郎・深澤芳樹・藤川智之・古川　登・森岡秀人・森本　徹・矢野健一・若林邦彦・和田晴吾
７．調査で出土した遺物・記録等は茨木市教育委員会　茨木市立文化財資料館で保管している。

凡　　例

１．調査にあたっては、平面垂直座標系第Ⅵ系（世界測地系）に準じて測量を行った。
２．本書で使用する標高はすべて T.P.（東京湾標準海水面）で表し、図中の方角はすべて座標北である。
３．遺構名称には遺構番号の前にＳＢ（掘立柱建物）、ＳＤ（溝）、ＳＥ（井戸）、ＳＫ（土坑）、ＳＰ（ピット）の略称を使用している。
４．調査・整理にあたって土色・土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版　標準土色帖』を基準として行った。
５．本書の遺物に付記された番号は通し番号であり、本文・挿図・表・写真図版における番号と一致する。
６．遺物実測図はその断面を須恵器は黒塗、瓦・土製品はトーン表現している。
７．写真図版の縮尺は統一していない。

本 文 目 次

はじめに ……1
第1章　調査成果 ……1
　第1節 はじめに ……1
　第2節 A区の調査成果 ……1
　　(1) 基本層序 ……1
　　(2) 遺構・遺物 ……3
　第3節 B区の調査成果 ……6
　　(1) 基本層序 ……6
　　(2) B1区の遺構・遺物 ……6
　　(3) B2区の遺構・遺物 ……13
　第4節 C区の調査成果 ……15
　　(1) 基本層序 ……15
　　(2) 上層の遺構・遺物 ……17
　　(3) 下層の遺構・遺物 ……18
第2章　まとめ ……21

挿 図(表) 目 次

第1図	調査区配置図	1	第15図	B1区遺構平面図(b)・断面図	8
第2図	A区遺構平面全体図	2	第16図	B1区遺構平面図(c)・断面図	10
第3図	A区東側土層断面柱状図	2	第17図	B1区SK1平面・断面図	11
第4図	A区遺構平面図(a)	3	第18図	B2区遺構平面図(a)・断面図	12
第5図	A区遺構断面図	3	第19図	B2区遺構平面図(b)・断面図	13
第6図	A区遺構平面図(b)	4	第20図	B2区遺構平面図(c)・断面図	14
第7図	A区遺構平面図(c)	4	第21図	B区出土遺物	15
第8図	SB2平面・断面図	5	第22図	C区西側土層断面柱状図	15
第9図	SB1平面・断面図	5	第23図	C区上層・下層遺構平面図	16
第10図	A区遺構平面・断面図(d)	6	第24図	C区上層遺構平面・断面図	17
第11図	A区SD1出土遺物	6	第25図	C区下層遺構平面図(北側)	18
第12図	B区南側土層断面柱状図	6	第26図	C区下層遺構平面図(南側)	19
第13図	B区遺構平面全体図	7	第27図	C区出土遺物	20
第14図	B1区遺構平面図(a)・断面図	9	第1表	出土遺物観察表	23

図 版 目 次

図版1	A・B・C区土層断面	1. A区東壁土層断面(西から)	2. B1区南壁土層断面(西から)
		3. B1区南壁土層断面(北から)	4. B2区東壁土層断面(西から)
		5. B2区東壁土層断面(西から)	6. C区西壁土層断面(東から)
図版2	C区土層断面　A区遺構	1. C区西壁土層断面(北東から)	2. C区西壁土層断面(南東から)
		3. A区SB1検出状況(東から)	4. A区完掘状況(東から)
		5. A区完掘状況(南から)	6. A区北東隅調査区全景(北から)
図版3	B1・2・C区　遺構	1. B1区北側検出状況(南から)	2. B1区南側検出状況(西から)
		3. B2区完掘状況(南から)	4. B2区検出状況(南から)
		5. B2区完掘状況(北から)	6. C区上層検出状況(北西から)
図版4	B1区　遺構	1. SE1土層断面(南から)	
		2. SK1土層断面(東から)	
		3. SK1完掘状況(東から)	
図版5	B1・B2区　遺構	1. B1区SK2土層断面	2. B1区SK2遺物出土状況(南から)
		3. B2区SP12土層断面(南から)	
図版6	出土遺物	1. B1区　SK1(3)、C区包含層(8・9)、C区　SD1(10)	
		2. A区　SD1(1)、B1区　SK1(2・4・5)、B2区　SK2(6)、SP29(7)	

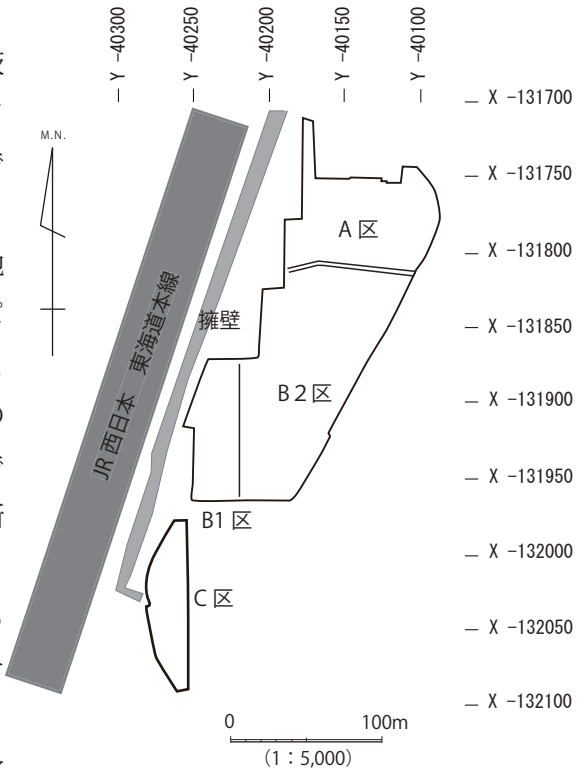
第１章　調査の成果

第１節　はじめに

ここで報告する松ケ本南遺跡は、立命館大学茨木キャンパス建設に伴うものであり、別項で報告されている中条小学校遺跡と同一敷地内にある遺跡である。

松ケ本南遺跡は、平成６年、当時専売公社の土地であった松ケ本町の敷地において、現在のショッピングモール建設に伴う調査において発見されたことに端を発する。このショッピングモールは、今回の調査地からＪＲ東海道線の線路を挟んで直線距離で約 200 ～ 300 ｍ西に位置しており、調査区を横断する西から東進する溝や土坑等が検出されている。

今次調査区は、面積が広大であり予定されている建物毎に調査区を北からＡ・Ｂ・Ｃ区と設定し、その都度、遺構番号を設定した。



第１図　調査区配置図

なお、Ａ区とＢ区には既存の水路があり、この水路が遺構面よりも深く構築されている事がわかったため、水路を敢えて破壊せずに調査時の排水路として使用した。また、Ｂ区については、調査の都合上、Ｂ区西側をＢ１区、東側をＢ２区として調査をおこなった。

第２節　Ａ区の調査成果

（１）基本層序

今次調査範囲全体に言える事ではあるが、隣接する中条小学校遺跡よりも地表面から遺構面までの深度が浅いこともあり、調査区の大半、特に西側において既存の建物の基礎や隣接地を南北に走るＪＲ東海道本線沿いの擁壁工事、また、解体時の掘削により攪乱されていた。

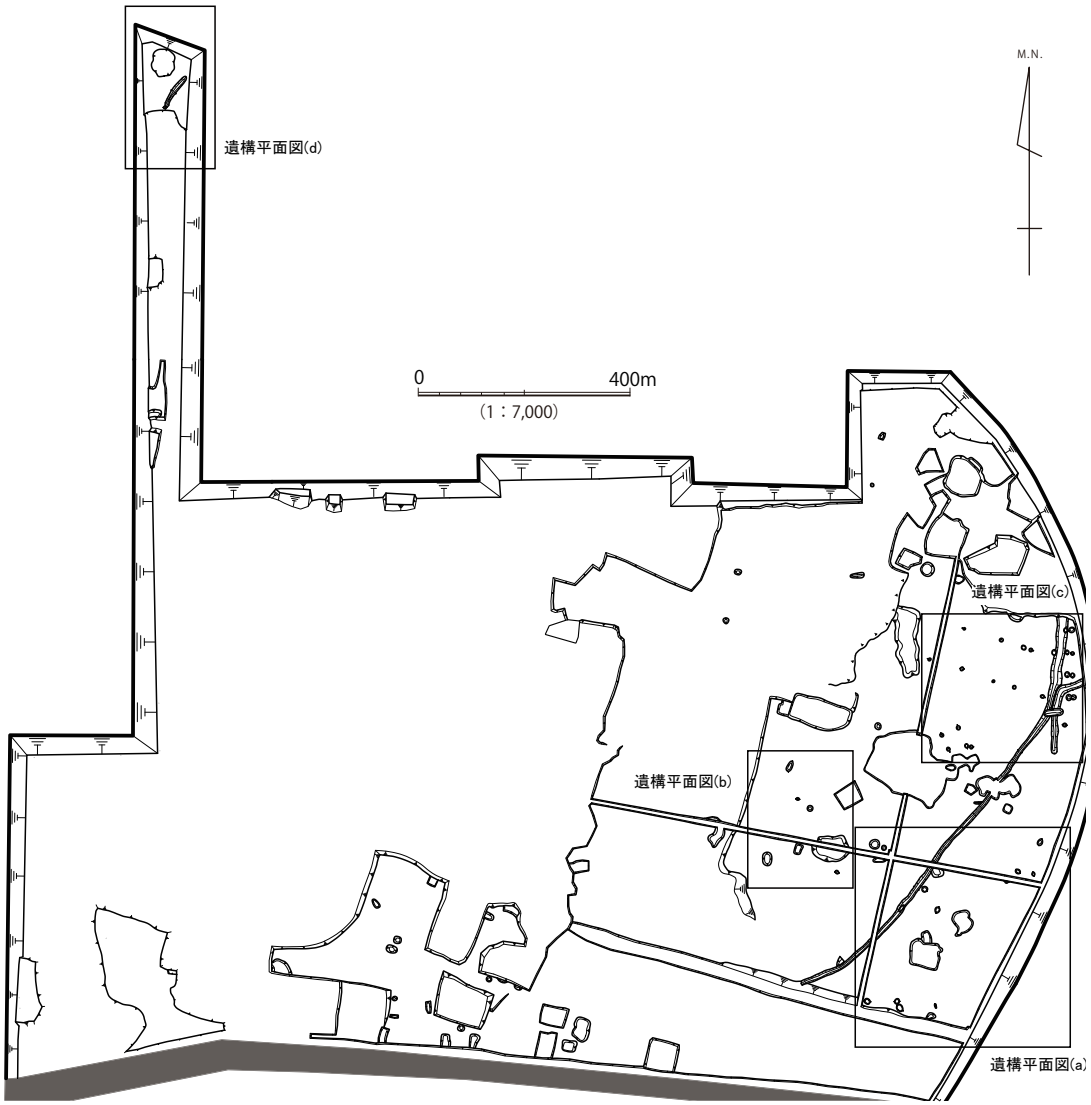
Ａ区については、東側の約１／３の範囲と北側に遺構面が残存しており、Ａ区の基本層序は、主として東側壁面で観察し得た状況に拠るところが大きい。

基本的な層序として、①現代盛土である。Ａ区の東側壁面では約１ｍ前後の盛土が確認できるが、他の箇所では、既存の建物あるいは、その解体時の際に攪乱された現代層が２ｍ以上に及ぶ場所がある。

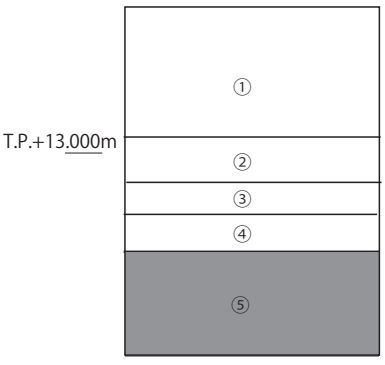
②は、旧耕土である。その多くは①層に削平を受けているものであり、層厚 10 ｃｍに満たないところがほとんどである。

③は、2．5Ｙ ６／１黄褐色粘質シルトと 10YR ５／４にぶい黄褐色粘質シルト（細粒砂混じり）が、一部では分層が可能なほど明瞭に上下に分かれるところもあるものの大半は不明瞭であったため、１つの層とした。

ただし、③層上層には鉄分の沈着とみられる黄褐色系の土が帯状に認められ、②層旧耕土に影響を



第２図　Ａ区　遺構平面全体図



①現代盛土
②旧耕土
③2.5Y6/1 黄褐色粘質シルトに 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト（細粒砂混じり）混入
④10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルトに 2.5Y 黄灰色（極細粒砂混じり）混入
⑤2.5Y6/6 明黄褐色粘質シルトに 10YR4/4 褐色粘質シルト混じる。
　一部、帯状の 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルトあり。

第３図　Ａ区　東壁土層断面柱状図

受けた鉄分の沈着層であると考えられる。

④は、10YR ４／３にぶい黄褐色の粘質シルトをメインとし、2.5Y ５／１黄灰色の粘質シルト（極細粒砂混じり）で構成される。この層を除去した後、遺構を検出したベース面となるが、この層から遺物の出土は認められなかった。

⑤は、当該調査区の遺構ベース面である。基本的には 2.5 Ｙ６／６にぶい黄色の粘質シルトであるが、一部鉄分の沈着とみられる変色した 10 ＹＲ ４／４褐色のものや、このベース面より下に潜り込む形で 2.5 Ｙ３／１黒褐色粘質シルトの土壌化層がみられる。土壌化層は、当初遺構とも考えられたが、ベース面下に潜っていく状況が見られたり、また、下方から隆起し、ベース面と同一レベルでみられたりする状況がサブ

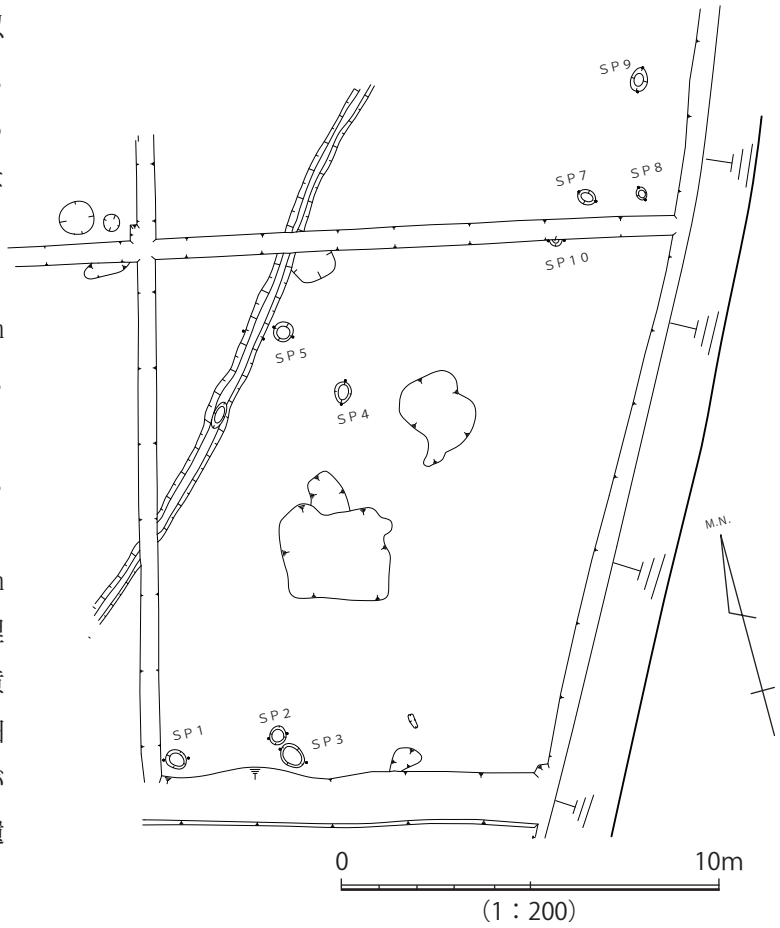
トレンチ断面にて確認できたため、今次調査の遺構面形成以前の土壌化層であると捉えた。なお、ベース面以下の層からは、遺構・遺物は確認していない。

（２）遺構・遺物

ＳＰ１　幅 65㎝、深さ 13㎝を計り平面形は楕円形である。埋土は、１層で 10 ＹＲ４／２灰黄褐色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ２　幅 44㎝、深さ７㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 10 ＹＲ４／２灰黄褐色の粘質シルトで若干極細流砂が混じる。わずかであるが炭化物が含まれていた。出土遺物はなかった。

ＳＰ３　幅 68㎝、深さ８㎝を計り平面形は楕円形である。埋土は１層で 10 ＹＲ４／１黄灰色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。



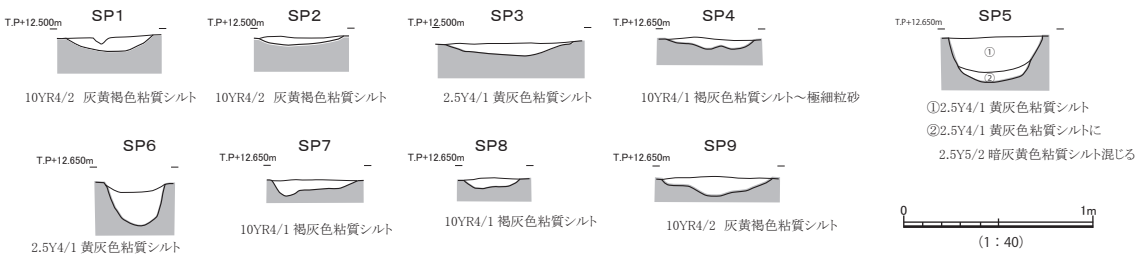
第４図　Ａ区　遺構平面図（a)

ＳＰ４　長軸幅 55㎝、短軸 40㎝を計り平面形は楕円形である。遺構の深度は、８㎝を計る。埋土は１層で 10 ＹＲ４／１褐灰色の粘質シルトで、若干極細粒砂を含んでいる。

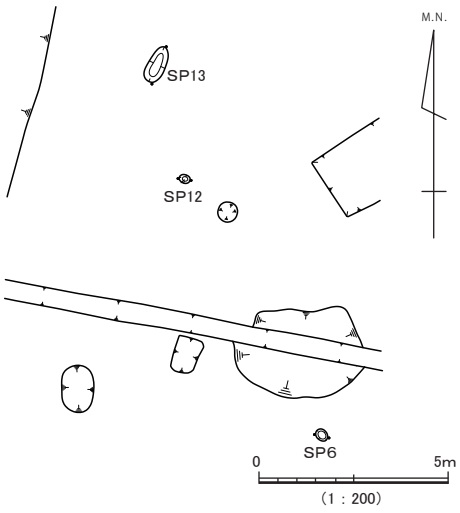
ＳＰ５　幅 50㎝、深度 23㎝を計り平面形は円形である。埋土は上下に２層に分かれ、① 2.5 Ｙ４／１黄灰色の粘質シルトで② 2.5 Ｙ４／１黄灰色の粘質シルトをメインとし 2.5 Ｙ５／２暗灰黄色が混じる。出土遺物はなかった。

ＳＰ６　断面幅 33㎝、深度 18㎝を計る。遺構検出段階では、平面は円形を呈していたが、北西から南東を長軸とする楕円形であった。長軸は約 50㎝を計る。埋土は、１層で 2.5 Ｙ４／１黄灰色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ７　長軸 49㎝、短軸 33㎝を計り平面形は楕円形である。遺構の深度は 10㎝で埋土は１層で 10 ＹＲ４／１褐灰色粘質シルトである。出土遺物はなかった。



第５図　Ａ区　遺構断面図



第６図　Ａ区　遺構平面図（b)

ＳＰ８　長軸30㎝､短軸25㎝を計り平面形は楕円形である。遺構の深度は８㎝を計り、埋土は１層で10ＹＲ４／１褐灰色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ９　長軸59㎝､短軸38㎝を計り平面形は楕円形である。遺構の深度は10㎝を計る。埋土は１層で10ＹＲ４／２灰黄褐色粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ１０　幅36㎝、深度５㎝を計る。平面は、一部サブトレンチ設定によって削ってしまったが円形である。埋土は１層で10ＹＲ４／１褐灰色粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ１１　幅30㎝、深度３㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で10ＹＲ５／１褐灰色粘質シルトに2.5Ｙ３／２黒褐色粘質シルトが混入している。出土遺物はなかった。

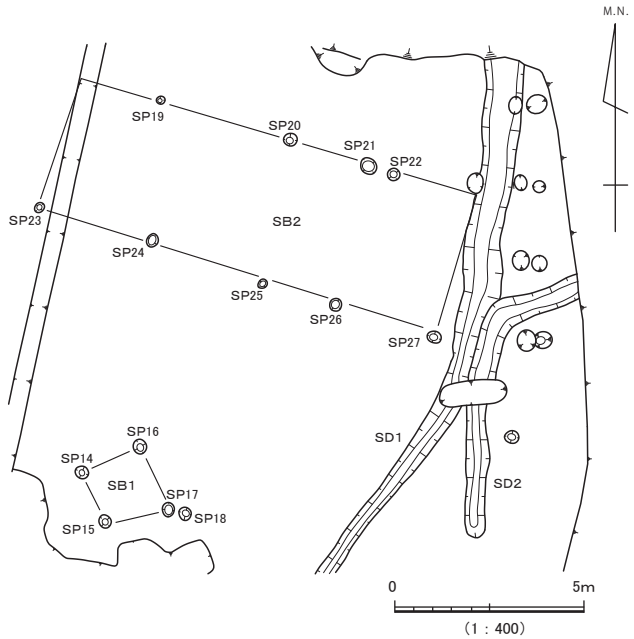
ＳＰ１２　幅25㎝、深度８㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で10ＹＲ４／１褐灰色粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ１３　長軸96㎝、短軸35㎝を計り平面形は楕円形である。埋土は南北に２層に分かれる。北側の①層は2.5Ｙ５／２暗灰黄色の粘質シルトで極細粒砂が含まれる。②層は、2.5Ｙ４／３オリーブ褐色の粘質シルトである。①層は、付近にはない極細粒砂が比較的多く含まれる層である。

ＳＰ１８　幅30㎝、震度６㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で2.5Ｙ４／１黄灰色粘質シルトである。

ＳＰ２８

調査区の北側で検出した。幅22㎝、深度10㎝を計り平面形は円形である。埋土は、2.5Ｙ５／２暗灰黄色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。



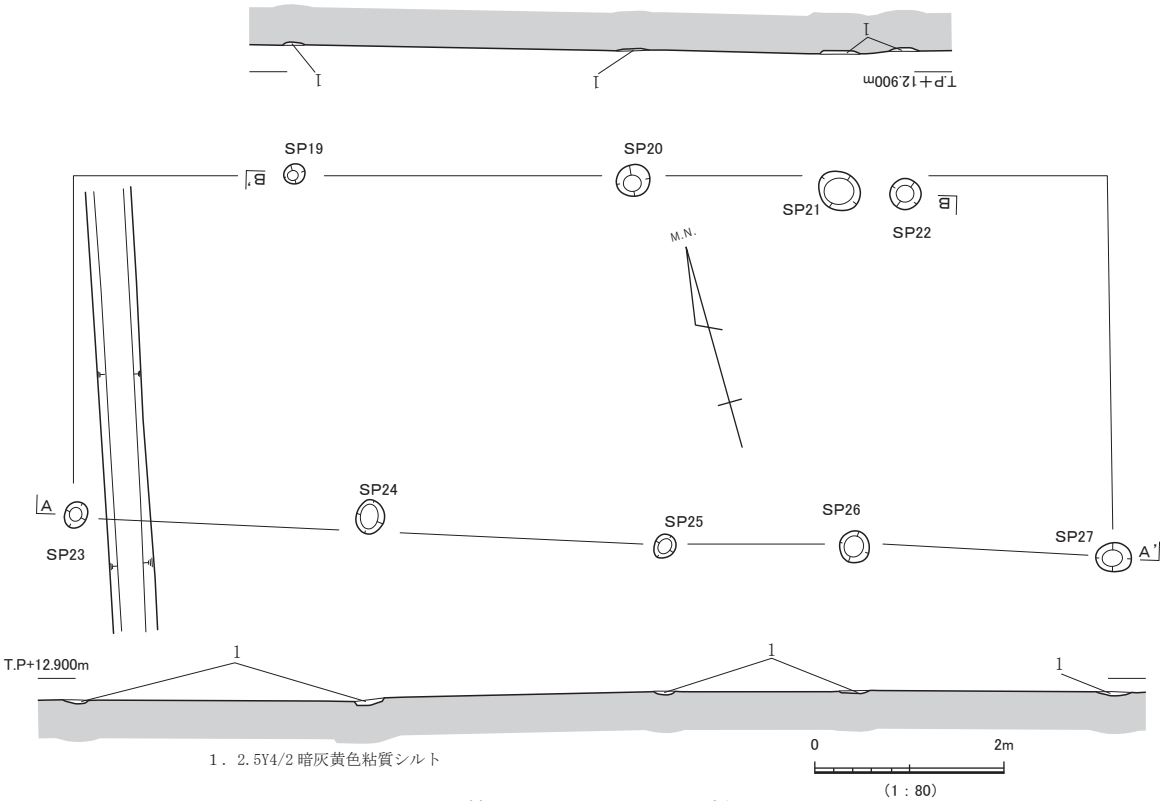
第７図　Ａ区遺構平面図（ｃ）

ＳＢ１

ＳＰ１４～ＳＰ１７のピットで構成される１×１の掘立柱建物である。検出した柱間は約1.5ｍであるが、ＳＰ17のみやや南東方向にわずかに軸がずれる。また、他のピットと比べると深度も浅い。各埋土は１層で共通しており、いずれも2.5Ｙ４／２暗灰黄色の粘質シルトであるが、ＳＰ17のみ極細粒砂が含まれる。出土遺物がなく所属時期は不明である。

ＳＢ２

ＳＰ１９～ＳＰ２７で構成される掘立柱建物である。埋土は、いずれも2.5Ｙ４／２暗灰黄色の粘質シルトである。



第８図　ＳＢ２平面・断面図

柱間は一定ではなく２ｍを超えるものもあり、また、ＳＰ 26 とＳＰ 27 のように柱間約 70㎝のものある。これらが掘立柱建物として構成されるものであるか疑問が残るが、各ピットがほぼ一列となること、相対するピットもほぼ同じ位置にある事、埋土が同様である事などから、掘立柱建物として捉えた。各ピットの深度が約５㎝程度と浅いため、本来あったであろうピットが削平を受け検出できなかった可能性もある。

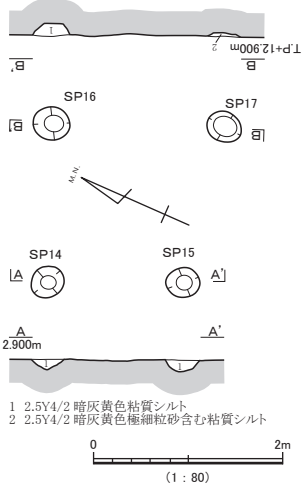
ＳＤ１　幅約 30㎝、深度約 15㎝を計る溝である。調査区の北東方向から緩やかに西進しつつ南へと続く。埋土は、①層 2.5 Ｙ４／２暗灰黄色の極細粒砂を含む砂質シルトで、②層は 2.5 Ｙ３／２黒褐色の粘質シルトである。断面観察のために設定したセクションでは、上記の２層であるが、部分的に深くなる箇所があり、その部分では細粒砂等のやや粗い砂も認められた。

溝が機能していた時期に流水があった可能性も考えられるが、その状況がみられるのは、深度が深い場所の一部に限られているため、恒常的に流水していたとは考えにくく、埋没する過程の中で堆積したものと捉えられる。

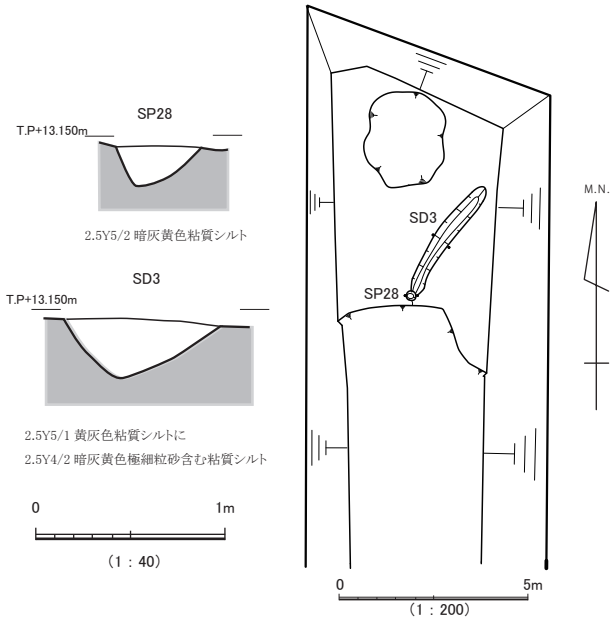
緩やかに湾曲する平面プランや、恒常的な流水を認めない埋土の状況を踏まえると、農耕に伴う区画溝のような役割を想定することもできるが、現段階においては推定の域をでない。

出土遺物に須恵器の坏蓋がある。天井部はやや丸みを帯び、つまみは乳首形である。７世紀後半頃の所産であると考えられる。他に、時期不明の土師器も出土している。

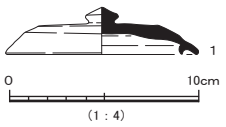
ＳＤ２　調査区東側で検出したＬ字状に曲がる溝である。一部、ＳＤ１と接しており、ＳＤ１を切った形であるため、ＳＤ１よりも新しい。幅 54㎝、深さ 15㎝を計り、埋土は 2.5 Ｙ４／２暗灰黄色の粘質シル



第９図　ＳＢ１平面・断面図



第 10 図　A区平面図（d）・断面図



第 11 図　A区ＳＤ１出土遺物

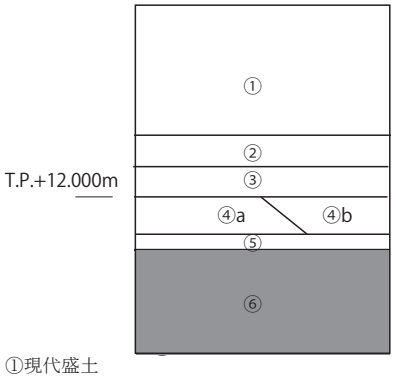
トであった。遺物は時期不明の土師器などが出土した。

ＳＤ３　調査区北側で検出した。南側はＳＰ２８に切られる形となる。幅 40㎝、深さは 17㎝で埋土は。５Ｙ５／１黄灰色の粘質シルトに 2.5Ｙ４／２暗灰黄色の極細粒砂含む砂質シルトであった。出土遺物はなかった。

第３節　Ｂ区の調査成果

（１）基本層序

調査区の南壁、Ｂ１区の範囲が最も良好に残る。①は現代盛土、②は旧耕土である。③は、５Ｙ６／４オリーブ褐色砂質シルトと５BG 青灰色の極細粒砂で構成される。A 区の旧耕土下と異なり、明瞭な鉄分の沈着などがみられず､むしろ青灰色の極細粒砂は水性体積によるものであると考えられる。その下の④ａ層のＮ６／の灰色砂質シルト、④ｂ層の５Ｙ６／３オリーブ黄色とＮ６／灰色砂質シルトの混合土も同様に水性体積によるものであると考えられ、④ａと④ｂ層の相違は、鉄分の影響で黄色に変色した差であると考えられる。



①現代盛土
②旧耕土
③5Y6/4 オリーブ褐色砂質シルトに 5BG青灰色の極細粒砂混じる。
④aN6/ 灰色砂質シルト
④b5Y6/3 オリーブ黄色砂質シルトに N6/ 灰色砂質シルト混じる。
⑤2.5Y6/6 明黄褐色粘質シルトに
2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト（極細粒砂含む）混じる。

第 12 図　Ｂ区南側土層断面柱状図

⑤層は、2.5Y ６／６明黄褐色粘質シルトに 2.5Y] ６／１黄灰色極細粒砂混じる粘質シルトで構成される。後述するＣ区の上層面に該当すると思われ、Ｂ区においても⑤層上面で検出を試みたが、遺構の検出はなかった。また、壁面図では、比較的良好な状態で図示できているが、Ｂ区全体をみると攪乱で大きく破壊されているため⑤層そのものが見られない箇所も多くあった。

⑥層は、2.5Y ４／１黄灰色粘質シルトである。この層を除去したのち、Ｂ区のベース面となる。

（２）Ｂ１区の遺構・遺物

Ｓ Ｐ １　幅 22 ㎝、深さ 13 ㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で

第 13 図　B 区遺構平面全体図

2.5 Y 4／2暗灰黄色の粘質シルトに極細粒砂が含まれる。出土遺物はなかった。

ＳＰ２　幅 18㎝、深さ 14㎝を計り、平面形は円形である。埋土は 1 層で 2.5 Y 4／2暗灰黄色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

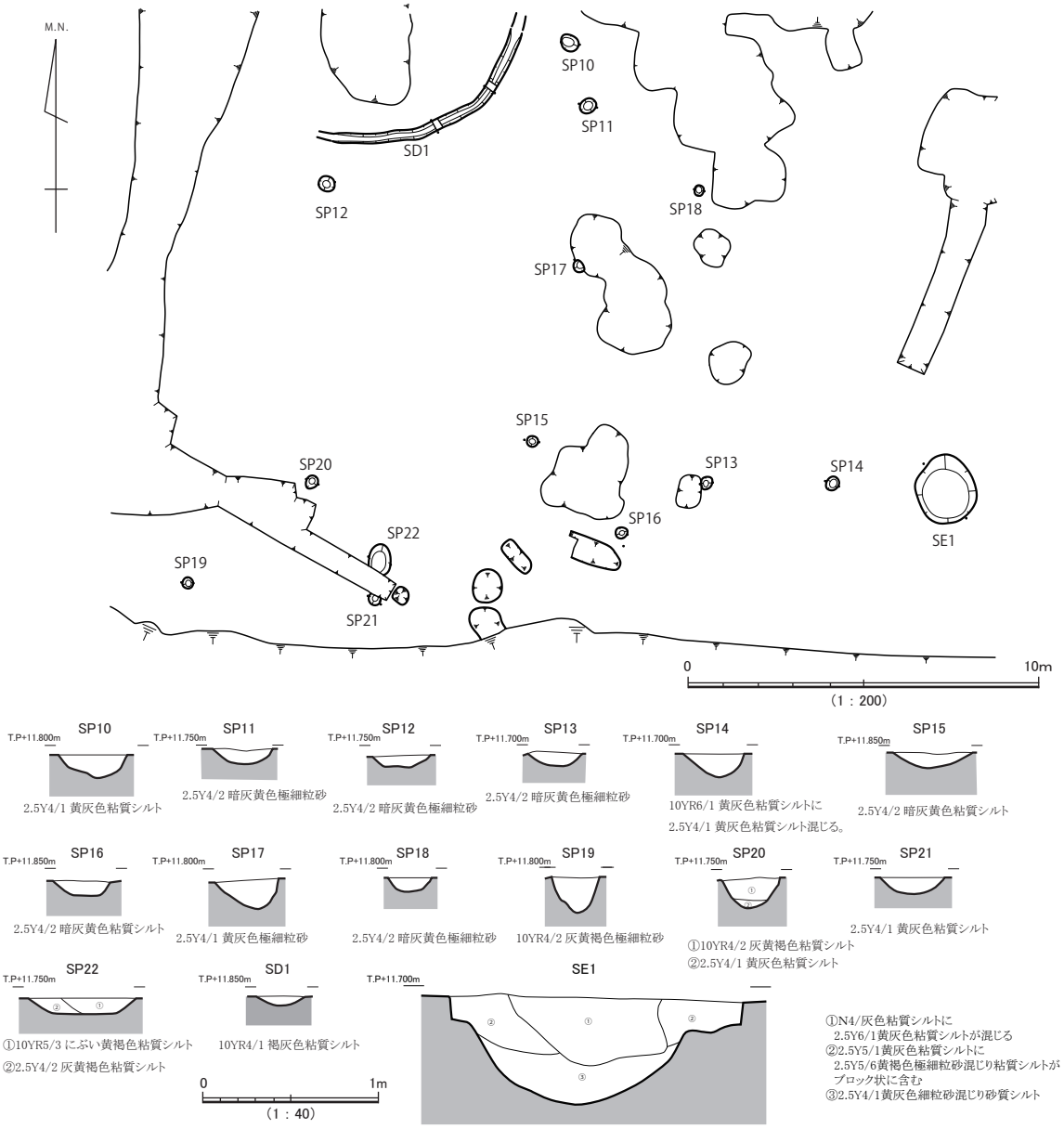
ＳＰ３　幅 21cm、深さ 14cm を計り、平面形は円形である。埋土は 1 層で 2.5Y 4／1 黄灰色の粘質シルトに 10YR 6／1 褐灰色の極細流砂が混じる状況である。

ＳＰ４　幅 30㎝、深さ 10㎝を計り、平面形は円形である。埋土は 1 層で 2.5 Y 4／2暗灰黄色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ５　幅 20㎝、深さ 8 ㎝を計り、平面形は円形である。埋土は 1 層で 2.5 Y 4／2暗灰黄色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ６　幅 20㎝、深さ 14㎝を計り、平面形は円形である。埋土は 1 層で 2.5 Y 4／2暗灰黄色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ７　幅 23㎝、深さ 10㎝を計り、平面形は円形である。埋土は 1 層で 2.5 Y 4／1 黄灰色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。



第 14 図　Ｂ１区遺構平面図（a）・断面図

ＳＰ８　幅 39㎝、深さ 18㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ５／２灰黄褐色の粘質シルトに 2.5 Ｙ４／２暗灰黄色粘質シルトが混じる。

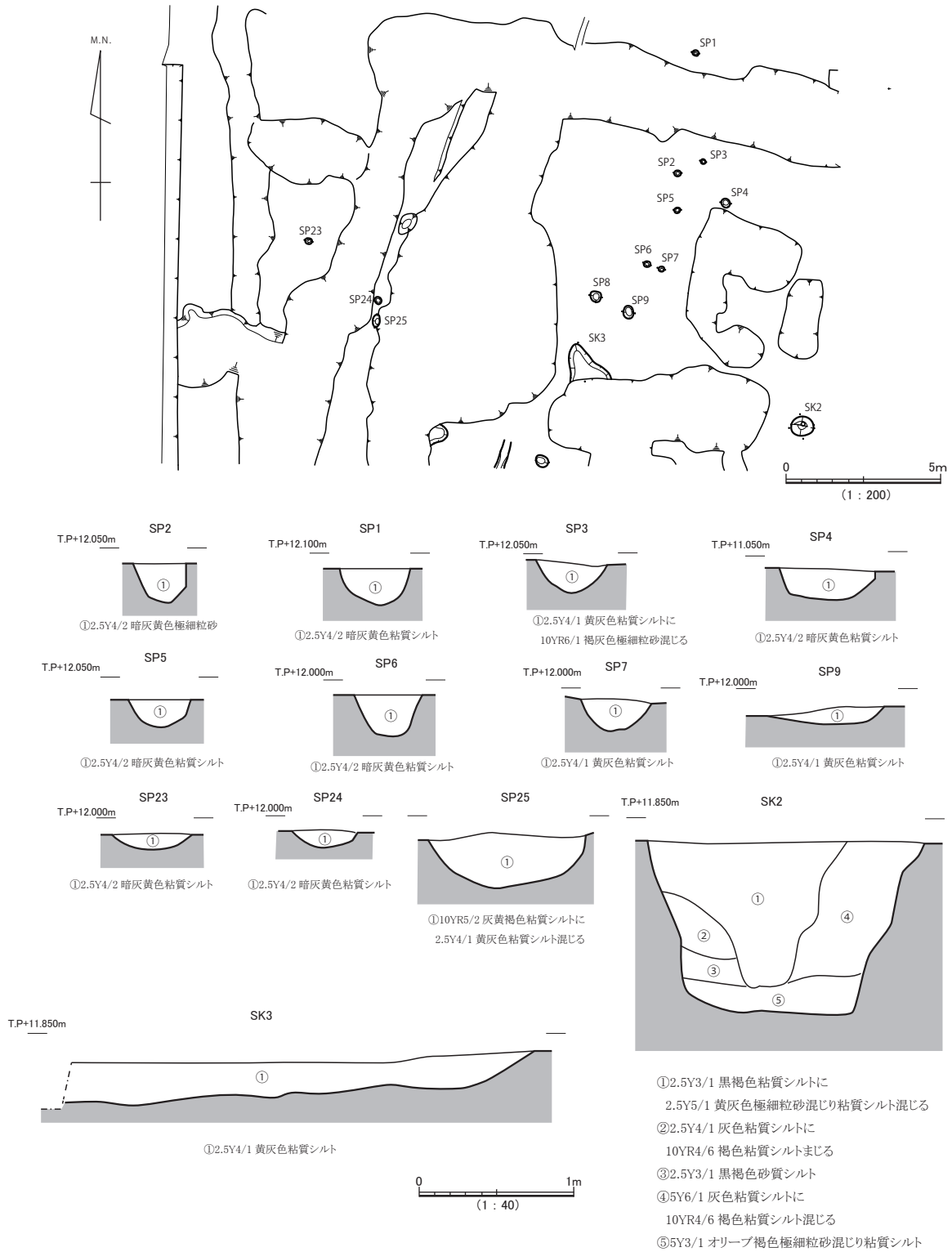
ＳＰ９　幅 39㎝、深さ７㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／１黄灰色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ 10　幅 39㎝、深さ 13㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／１黄灰色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ 11　幅 32㎝、深さ８㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／２暗灰黄色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ 12　幅 32㎝、深さ７㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／２暗灰黄色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ 13　幅 29㎝、深さ６㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／２暗灰黄色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。



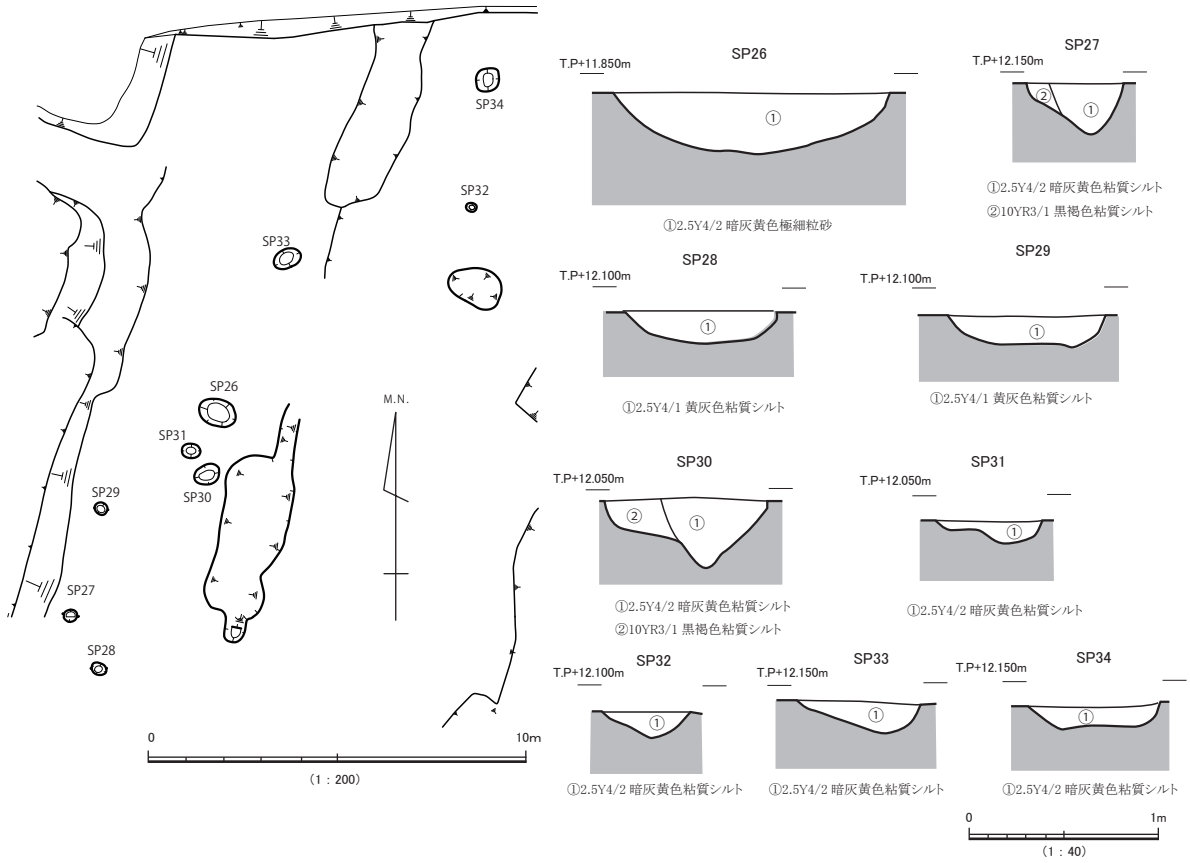
第 15 図　Ｂ１区遺構平面図（b）・断面図

ＳＰ 14　幅 32㎝、深さ 14㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 10 ＹＲ６／１黄灰色の粘質シルトに 2.5 Ｙ４／１黄灰色粘質シルト混じる。出土遺物はなかった。

ＳＰ 15　幅 45㎝、深さ９㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／２暗灰黄色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ 16　幅 42㎝、深さ 10㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／２暗灰黄色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ 17　幅 34㎝、深さ 17㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／１黄灰色の



第 16 図　B 1 区遺構平面図（c）・断面図

極細流砂である。出土遺物はなかった。

ＳＰ 18　幅 24㎝、深さ 7 ㎝を計り、平面形は円形である。埋土は 1 層で 2.5 Ｙ 4 ／ 2 暗灰黄色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ 19　幅 26㎝、深さ 18㎝を計り、平面形は円形である。埋土は 1 層で 10 ＹＲ 4 ／ 2 灰黄褐色の極細流砂である。出土遺物はなかった。

ＳＰ 20　幅 31㎝、深さ 17㎝を計り、平面形は円形である。埋土は 2 層で① 10 ＹＲ 4 ／ 2 灰黄褐色の粘質シルト② 2.5 Ｙ 4 ／ 1 黄灰色粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ 21　幅 35㎝、深さ 10㎝を計り、平面形は円形である。埋土は 1 層で 2.5 Ｙ 4 ／ 1 黄灰色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

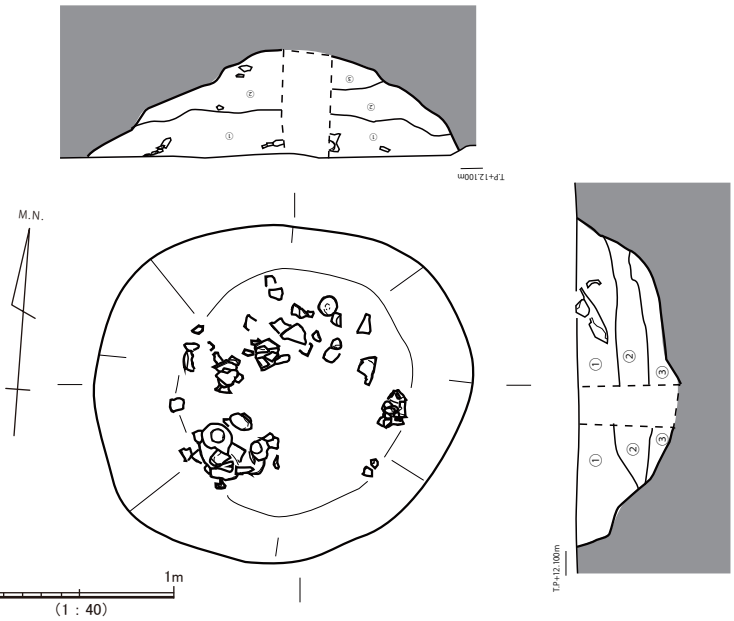
ＳＰ 22　幅 59㎝、深さ 10㎝を計り、平面形は円形である。埋土は 2 層で① 10 ＹＲ 5 ／ 3 にぶい黄褐色の粘質シルト② 2.5 Ｙ 4 ／ 2 灰黄褐色粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ 23　幅 24㎝、深さ 5 ㎝を計り、平面形は円形である。埋土は 1 層で 2.5 Ｙ 4 ／ 2 暗灰黄褐色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ 24　幅 23㎝、深さ 5 ㎝を計り、平面形は円形である。埋土は 1 層で 2.5 Ｙ 4 ／ 2 暗灰黄褐色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ 25　幅 50㎝、深さ 16㎝を計り、平面形は円形である。埋土は 1 層で 10 ＹＲ 5 ／ 2 灰黄褐色の粘質シルトに 2.5 Ｙ 4 ／ 1 黄灰色粘質シルトが混じる。出土遺物はなかった。

ＳＰ 26　幅 71㎝、深さ 14㎝を計り、平面形は円形である。埋土は 1 層で 2.5 Ｙ 4 ／ 2 暗灰黄褐色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。



第17図　Ｂ１区ＳＫ１平面・断面図

ＳＰ27　幅24㎝、深さ14㎝を計り、平面形は円形である。埋土は２層で①2.5 Ｙ４／２暗灰黄色の粘質シルト②10 ＹＲ３／１黒褐色粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ28　幅38㎝、深さ６㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で2.5 Ｙ４／１黄灰色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ29　幅37㎝、深さ８㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で2.5 Ｙ４／１黄灰色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ30　幅38㎝、深さ18㎝を計り、平面形は円形である。埋土は２層で①2.5 Ｙ４／２暗灰黄色の粘質シルト②10 ＹＲ３／１黒褐色粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ31　幅27㎝、深さ６㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で2.5 Ｙ４／２暗灰黄褐色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ32　幅21㎝、深さ６㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で2.5 Ｙ４／２暗灰黄褐色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ33　幅31㎝、深さ８㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で2.5 Ｙ４／２暗灰黄褐色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ34　幅31㎝、深さ３㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で2.5 Ｙ４／２暗灰黄褐色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ35　幅30㎝、深さ６㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で2.5 Ｙ４／２暗灰黄褐色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＫ１　幅約２ｍ、深さ約60㎝を計る円形の土坑である。埋土は３層に分かれる。①2.5 Ｙ４／１黄灰色砂質シルトに2.5 Ｙ３／１黒褐色極細粒砂含む粘質シルトで②５Ｙ３／１黒褐色砂質シルトに2.5 Ｙ４／１黄灰色粘質シルトが少量混じる。③は５Ｙ５／１灰色に22.5 Ｙ３／１黒褐色の極細粒砂と細粒砂の混合土が混じる。

出土遺物として甕や高坏等が挙げられるが、いずれも弥生時代中期の所産であろう。今次調査区の中で最も出土遺物量が多かったが、いずれも砕片であり接合を試みたが、完形になるものはなかった。

また、出土した遺物は①と②層からの出土であり、③層からの出土は認められなかった。③層の埋土が、他遺構の埋土とはやや異なり粒子の粗い砂質による堆積であり、ＳＫ２掘削後、しばらく開口していた時期があったものと考えられるが、周辺に同時期と確証の持てる遺構が少ないため、推察の域を出ない。

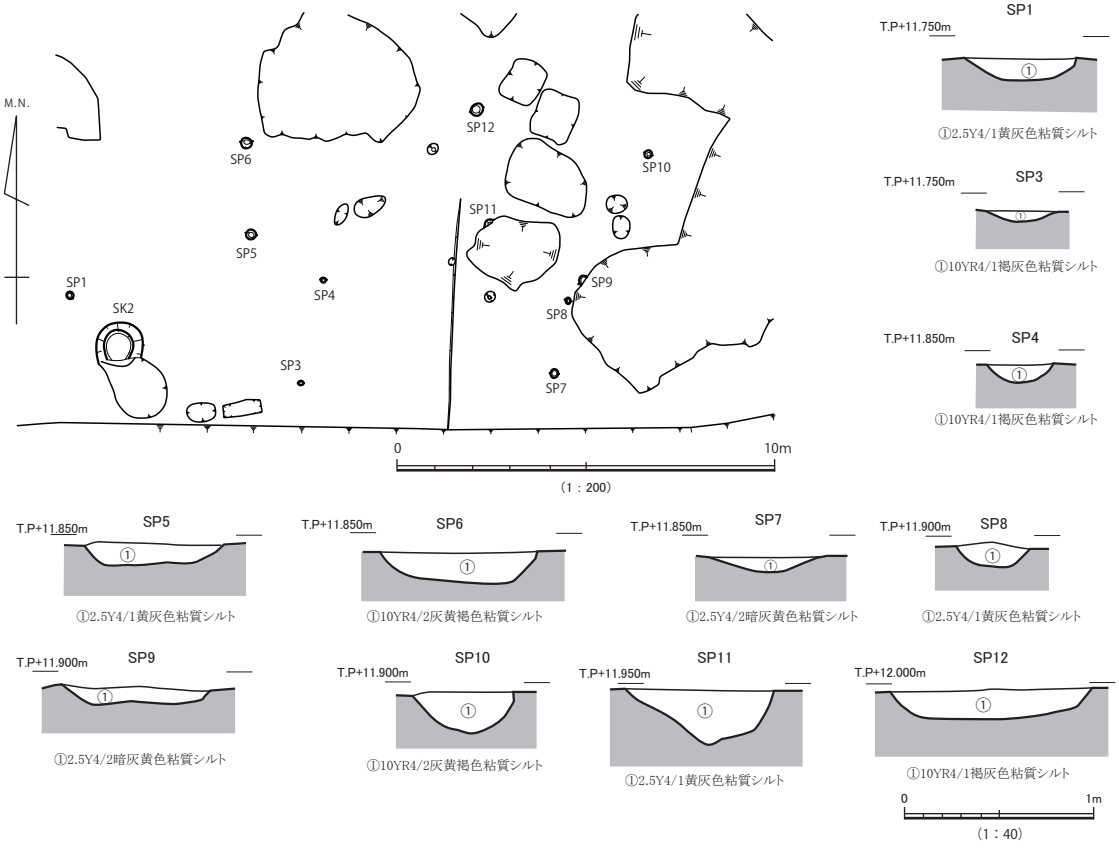
ＳＫ２　幅85㎝深さ42㎝を計る円形の土坑である。埋土は５層に分けられる。①2.5 Ｙ３／１黒

褐色粘質シルトに 2.5 Ｙ５／１黄灰色極細粒砂混じり粘質シルトが混じる。②５Ｙ４／１灰色粘質シルトに 10 ＹＲ４／６褐色粘質シルトが混じる。③ 2.5 Ｙ３／１黒褐色砂質シルトで④５Ｙ６／１灰色粘質シルトに 10 ＹＲ４／６褐色粘質シルト⑤５Ｙ３／１オリーブ褐色の極細粒砂混じり粘質シルトであった。出土遺物は、①層の底面で⑤層との境目に弥生時代中期の所産と思われる高坏が出土している。断面の分層を見る限りでは、柱穴として見て取れるが、これまでの述べてきたように今次調査区の柱穴と思われるピット群はいずれも掘方が浅いため、同様には捉えられず、倒木痕の可能性もあるが、遺構の詳細は不明である。

ＳＫ３　一部攪乱によって破壊を受けているため全容は不明であるが検出長軸 1.4 ｍの落ち込みである。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／１黄灰色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＥ１　幅約 1.6 ｍを計り平面形は円形である。埋土は３層で①Ｎ４／灰色粘質シルトに 2.5 Ｙ６／１黄配色粘質シルトが混じる。② 2.5 Ｙ５／１黄灰色粘質シルトに 2.5 Ｙ５／６黄褐色極細粒砂混じり粘質シルトがブロック状に含まれる。2.5 Ｙ５／６黄褐色は、周囲のベース土である。③ 2.5 Ｙ４／１黄灰色砂質シルトに若干細粒砂が混じる。出土遺物はなかった。この遺構を検出した当初、周囲に同様の規模の遺構がなく、また、深度が深い、平面プランがほぼ円形となるなどから井戸として捉えたが、ＳＫ１と規模的には同様の形態となっており、土坑の可能性も考えられる。

ＳＤ１　検出幅 28㎝を計り、平面形はやや円を描くような形の溝である。埋土は１層で、10 ＹＲ４／１褐灰色粘質シルトである。出土遺物はなかった。



第 18 図　Ｂ２区遺構平面図（ａ）・断面図

（3）B 2区の遺構・遺物

ＳＰ１　幅 29㎝、深さ６㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／１黄灰色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ３　幅 18㎝、深さ３㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 10 ＹＲ４／１褐灰色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ４　幅 17㎝、深さ４㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 10 ＹＲ４／１褐灰色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ５　幅 37㎝、深さ５㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／１黄灰色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ６　幅 40㎝、深さ８㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／２暗灰黄褐色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ７　幅 30㎝、深さ３㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／２暗灰黄褐色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

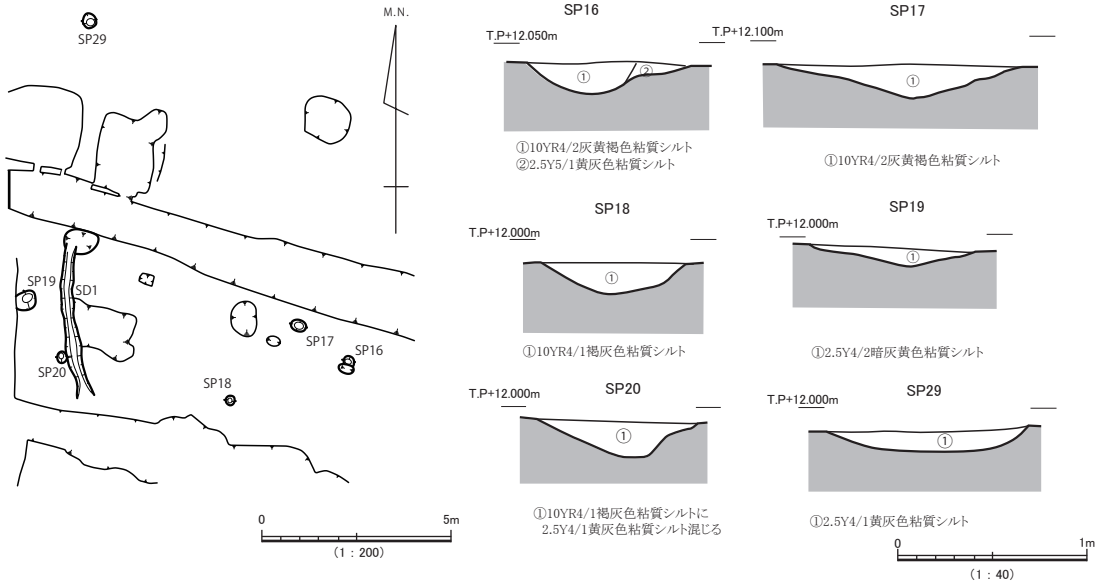
ＳＰ８　幅 37㎝、深さ５㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／１黄灰色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ９　幅 38㎝、深さ４㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／２暗灰黄褐色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

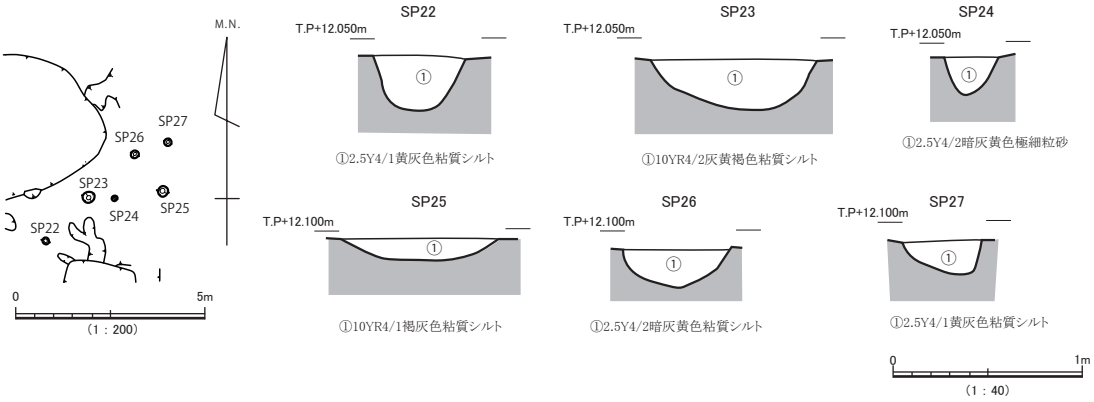
ＳＰ 10　幅 25㎝、深さ 10㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／２暗灰黄褐色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ 11　幅 37㎝、深さ 15㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／２暗灰黄褐色の粘質シルトに 2.5 Ｙ４／１黄灰色粘質シルトが混じる。出土遺物はなかった。

ＳＰ 12　幅 54㎝、深さ７㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／１黄灰色の粘



第 19 図　Ｂ２区遺構平面図（ｂ）・断面図



第 20 図　Ｂ２区遺構平面図（ｃ）・断面図

質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ 13　幅 45㎝、深さ 13㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／１黄灰色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ 14　幅 37㎝、深さ５㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 10 ＹＲ４／２灰黄褐色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ 15　幅 42㎝、深さ６㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／１黄灰色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ 16　幅 44㎝、深さ９㎝を計り、平面形は円形である。埋土は２層で① 10 ＹＲ４／２灰黄褐色の粘質シルト② 2.5 Ｙ５／１黄灰色粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ 17　幅 64㎝、深さ８㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 10 ＹＲ４／２灰黄褐色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ 18　幅 37㎝、深さ５㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 10 ＹＲ４／１褐灰色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ 19　幅 47㎝、深さ５㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／２暗灰黄褐色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ 20　幅 40㎝、深さ８㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 10 ＹＲ４／１褐灰色の粘質シルトに 2.5 Ｙ４／１黄灰色粘質シルト混じる。出土遺物はなかった。

ＳＰ 21　幅 73㎝、深さ 12㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 10 ＹＲ４／２灰黄褐色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

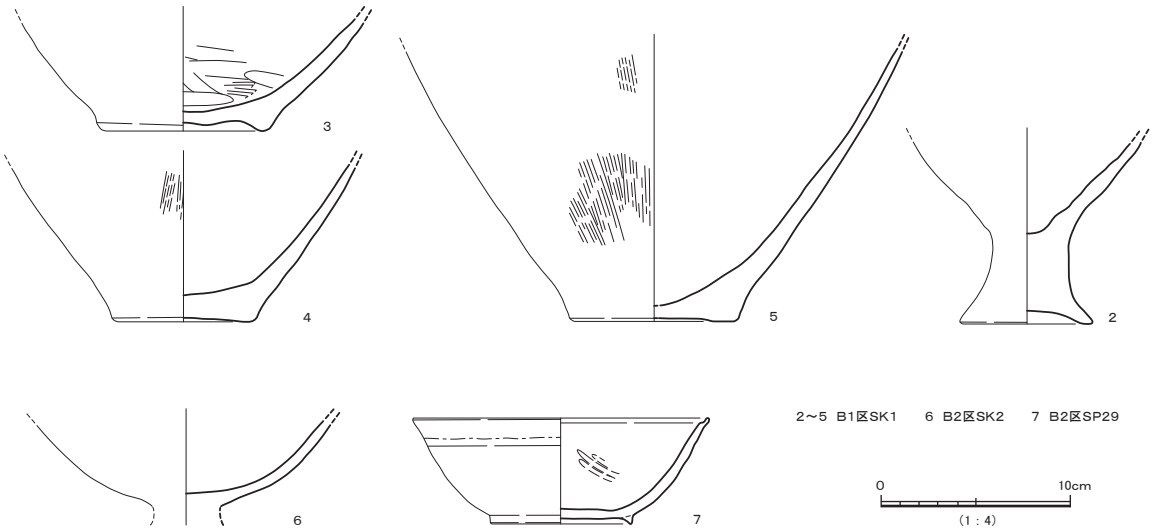
ＳＰ 22　幅 24㎝、深さ 15㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／１黄灰色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ 23　幅 42㎝、深さ 14㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 10 ＹＲ４／２灰黄褐色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ 24　幅 15㎝、深さ 11㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／２暗灰黄褐色の極細流砂である。出土遺物はなかった。

ＳＰ 25　幅 42㎝、深さ７㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 10 ＹＲ４／１褐灰色の極細流砂である。出土遺物はなかった。

ＳＰ 26　幅 29㎝、深さ 11㎝を計り、平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／２暗灰黄褐色の極細流砂である。出土遺物はなかった。



第 21 図　B区出土遺物

ＳＰ 27　幅 21㎝、深さ 10㎝を計り、平面形は円形である。埋土は 1 層で 2.5 Ｙ 4 ／ 1 黄灰色の粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ 28　幅 36㎝、深さ 10㎝を計り、平面形は円形である。埋土は 2 層で① 10 ＹＲ 4 ／ 1 褐灰色の粘質シルトで② 2.5 Ｙ 4 ／ 1 黄灰色粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ 29　幅 53㎝、深さ 5 ㎝を計り、平面形は円形である。埋土は 1 層で 2.5 Ｙ 4 ／ 1 黄灰色の粘質シルトである。出土遺物として黒色土器Ａ類椀がある。内面にわずかにヘラミガキが認められるが摩耗が著しい。11 世紀代の所産と思われる。

第 4 節　Ｃ区の調査成果

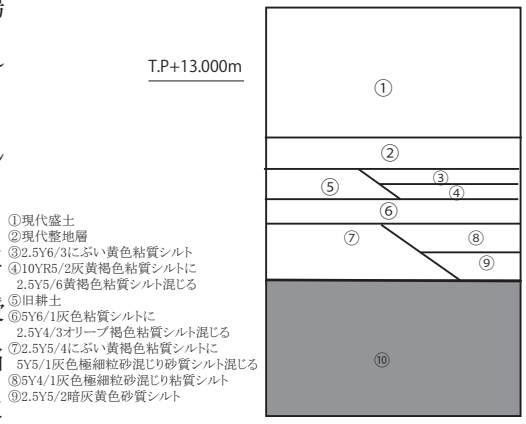
（1）基本層序

Ｃ区の基本層序は最も残りがよかった西壁である。東側と南側のほとんどは既存建物の基礎や解体による整地によって破壊を受けている。

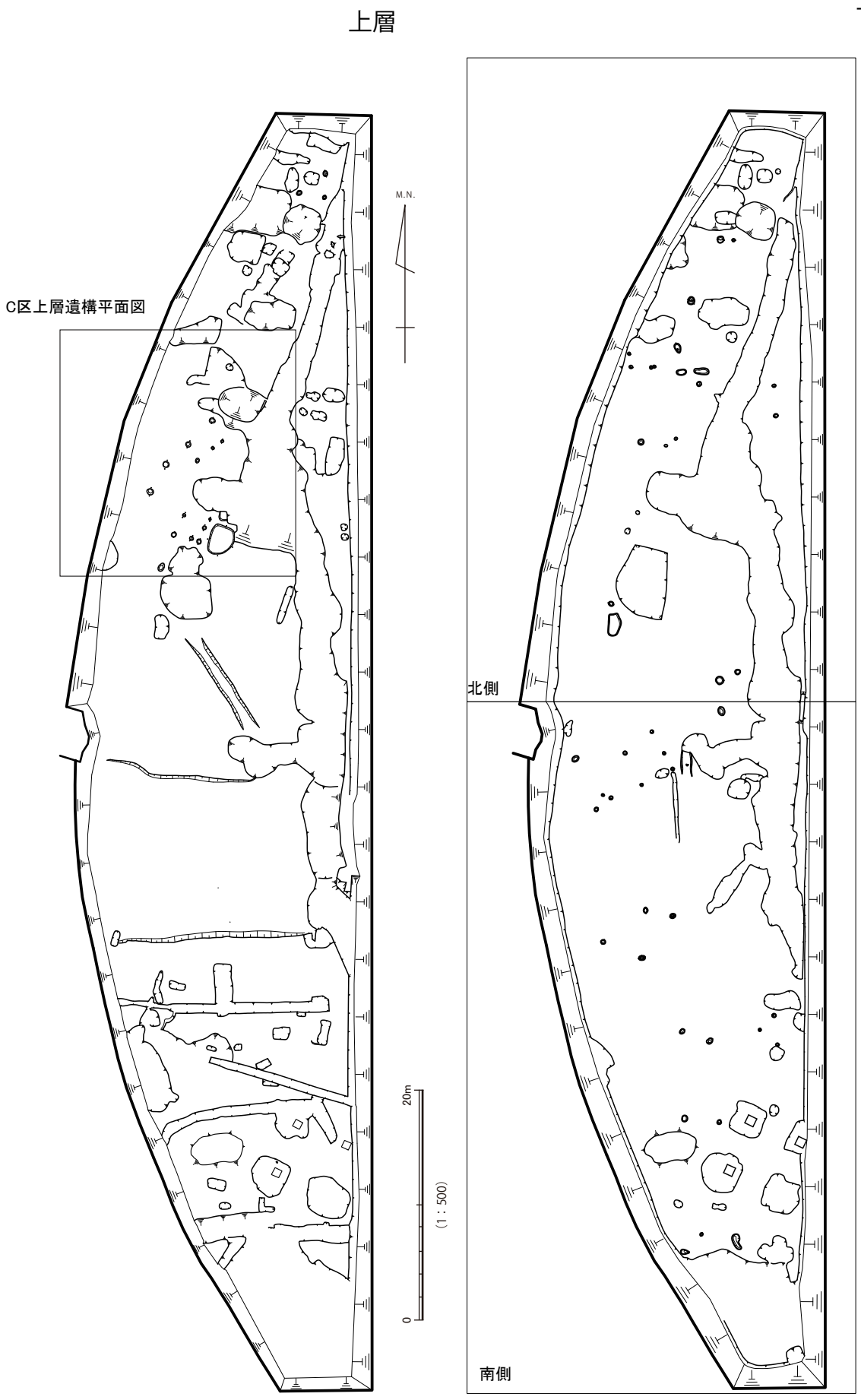
①は現代盛土であるが、すべてが既存建物の基礎や解体に伴う整地土ではなく、西側にあるＪＲ東海道本線の線路と当該地の境に設けられた土手の盛土も一部残るが、これらの詳細な分層は困難であったため一括して現代盛土として扱った。

また、②は、①と同様に少なくとも昭和時代のものと思われるが、近年盛られたであろう①とは明瞭な境目が認められたため、分けている。当該地が工場地として造成された際に整地された現代整地層と思われる。

その下の③は、2.5 Ｙ 6 ／ 3 にぶい黄褐色の粘質シルト、④は、10 ＹＲ 5 ／ 2 灰黄褐色粘質シルトに 2.5 Ｙ 5 ／ 6 黄褐色粘質シルトが混じる。③と④層は、南側には認められず、また、北側も現代盛土によって削平を受けているため、詳細は不明であるが、工場用地として当該地が整地される前にあった耕作地に伴う整地のように見て取れ、特に③は、耕土下にある床土の様相に類似



第 22 図　Ｃ区西側土層断面柱状図



第 23 図　C区上層・下層遺構平面図

する。

⑤は、2.5 Ｙ５／１黄褐色粘質シルトに極細粒砂混じる。時期は不明であるが旧耕土である。⑥は、５Ｙ６／１灰色粘質シルトに 2.5 Ｙ５／６黄褐色粘質シルトが混じっている。

この層から瓦片や「て」の字状口縁をもつ土師器皿、瓦器椀、瓦質羽釜、東播系須恵器と思われる鉢の底部などが出土している。一見、中世段階でまとまりをなすと思われるが、瓦器椀は底部が衰退化した 13 ～ 14 世紀の所産、「て」の字状土師皿は、12 世紀代までのものと思われ、時期にややばらつきがみられる。瓦は、いずれも砕片で実測には至らなかったが、凹面凸面ともにナデによるスリけしがおこなわれており、中世以降のものである。この⑥層を除去後、Ｃ区の上層遺構面を検出した。

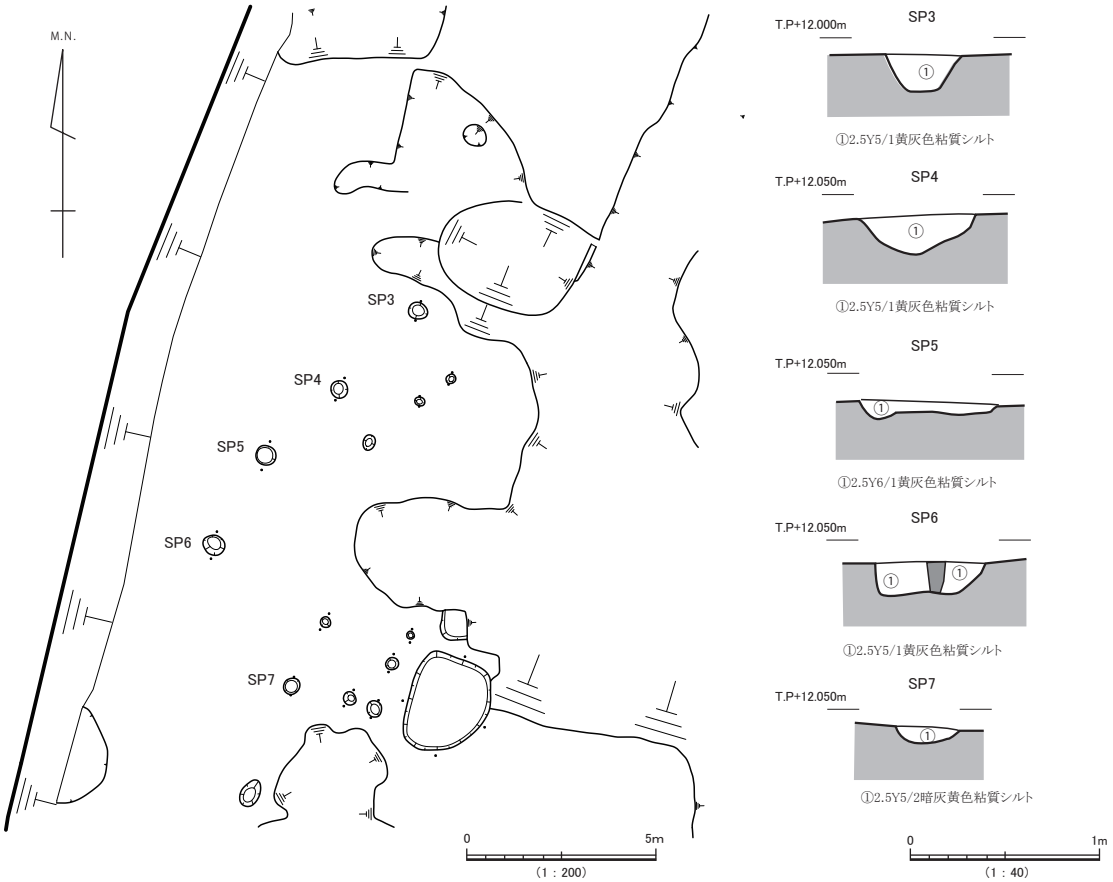
⑦は、2.5 Ｙ５／４にぶい黄褐色粘質シルトに５Ｙ５／１灰色の砂質シルトが混じる。この層からの出土遺物として須恵器の坏身口縁が挙げられるが、砕片のため実測はできなかった。７世紀初頭頃の所産であると思われる。⑦層除去後、Ｃ区下層遺構面を検出した明黄褐色系の粘質シルトの遺構面となる。

（２）上層の遺構・遺物

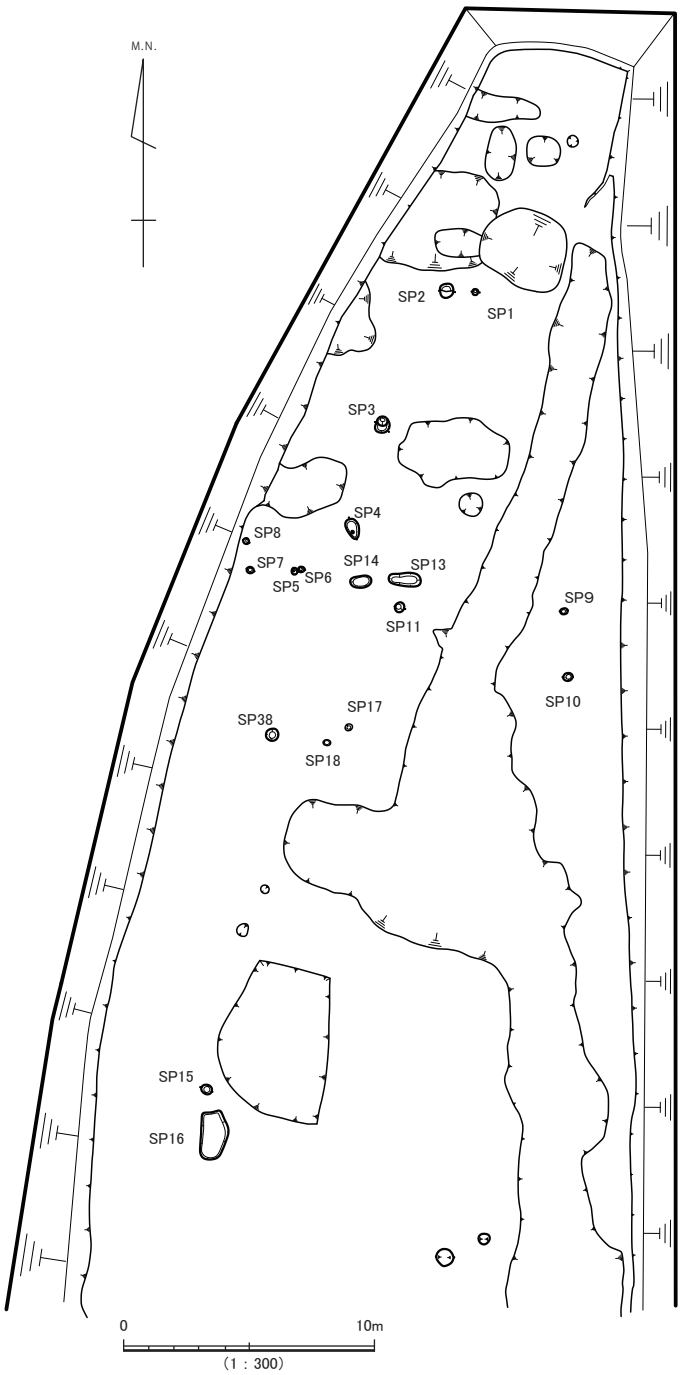
ＳＰ１　幅 68㎝、深さ７㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で５Ｙ５／２灰オリーブ粘質シルトである。出土遺物はなかった。

ＳＰ３　幅 21㎝、深さ 10㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ５／１黄灰色の極細粒砂混じり粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＰ４　幅 30㎝、深さ 12㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ５／１黄灰色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。



第 24 図　Ｃ区上層遺構平面図・断面図



第 25 図　C 区下層遺構平面図（北側）

ＳＰ５　幅 35㎝、深さ４㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ６／１黄灰色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＰ６　幅 24㎝、深さ 10㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ５／１黄灰色粘質シルトであった。遺構のほぼ中央に柱痕と思われる木材が残存していた。出土遺物はなかった。

ＳＰ７　幅 16㎝、深さ５㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ５／２暗灰黄色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＰ 11　幅 48㎝、深さ 11㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で５Ｙ５／１灰色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＰ 12　幅 44㎝、深さ 10㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ６／２灰黄色粘質シルトに 2.5 Ｙ５／１黄灰色極細粒砂混じりの粘質シルトが混じる。であった。出土遺物はなかった。

ＳＤ１　幅 64㎝、深さ９㎝の溝である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／１灰黄色粘質シルトである。出土遺物として須恵器の坏が認められる。口縁部が欠損しているが、ＴＫ 209 ～ＴＫ 217 に相当すると思われる。

ＳＤ２　幅約１ｍ、深さ 10㎝の溝である埋土は１層で 2.5 Ｙ５／１灰色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＫ１　幅 1.95 ｍ、深さ６㎝を計る。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／１黄灰色の極細粒砂から細粒砂が混じる砂質シルトであった。出土遺物はなかった。

（３）下層の遺構・遺物

ＳＰ１　幅 19㎝、深さ５㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／２暗灰黄色の極細粒砂であった。出土遺物はなかった。

ＳＰ２　幅 52㎝、深さ７㎝を計り平面形は楕円形である。埋土は上下２層に分かれ①で 2.5 Ｙ４

／２暗灰黄色粘質シルト、②５Ｙ６／２灰オリーブ粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＰ３　幅 47㎝、深さ４㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／２暗灰黄色の極細粒砂であった。出土遺物はなかった。

ＳＰ４　幅 77㎝、深さ５㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／１黄灰色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

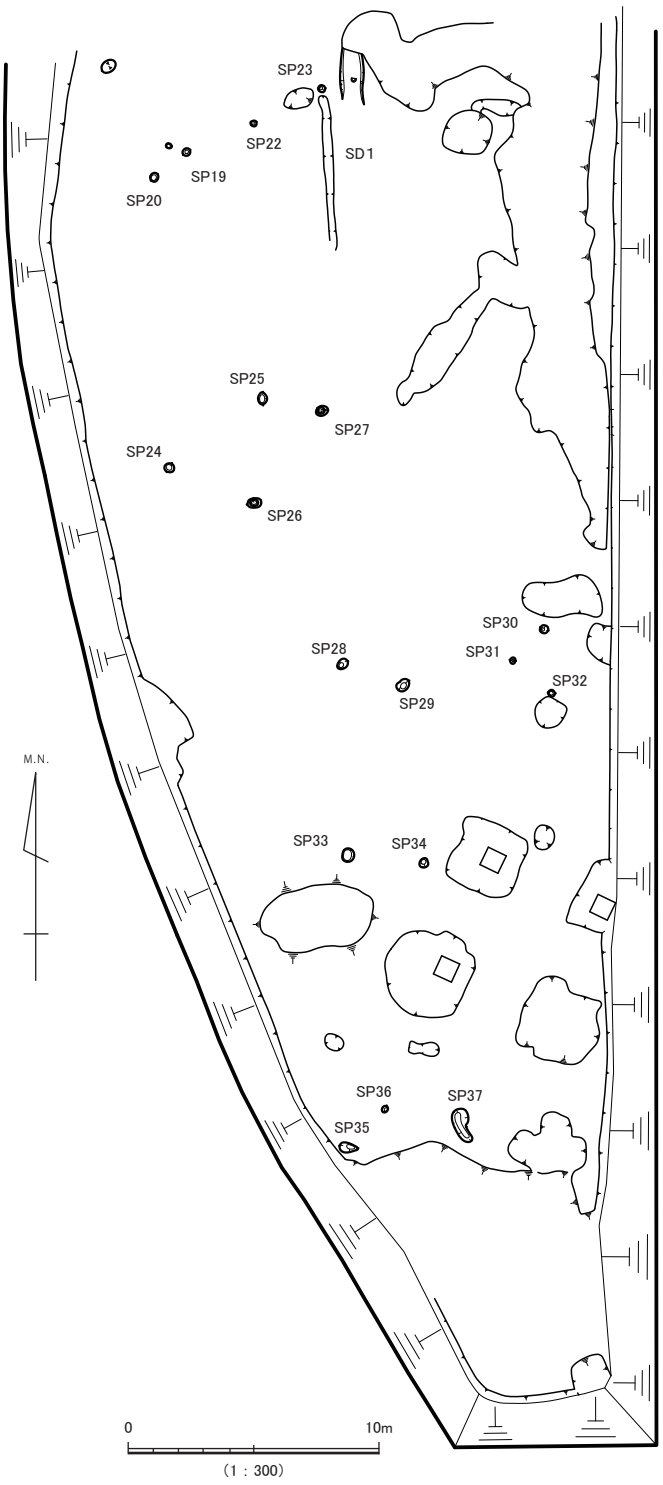
ＳＰ５　幅 25㎝、深さ５㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／１黄灰色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＰ６　幅 20㎝、深さ３㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／２暗灰黄色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＰ７　幅 47㎝、深さ４㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／１黄灰色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＰ８　幅 32㎝、深さ５㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／１黄灰色粘質シルトに 10 ＹＲ５／３にぶい黄褐色粘質シルトのブロックが混じるで。10 ＹＲ５／３にぶい黄褐色は周囲のベース土である。出土遺物はなかった。

ＳＰ９　幅 28㎝、深さ５㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／２暗灰黄色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。



第 26 図　Ｃ区下層遺構平面図（南側）

ＳＰ 10　幅 31㎝、深さ４㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／２暗灰黄色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＰ 11　幅 36㎝、深さ 10㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 10 ＹＲ４／３にぶい黄褐色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＰ 13　幅 67㎝、深さ４㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／１黄灰色粘質シ

ルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＰ 14　幅 70㎝、深さ４㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／１黄灰色の極細粒細混じり粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＰ 15　幅 22㎝、深さ４㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／２暗灰黄色粘質シルトに５Ｙ６／２灰オリーブ色極細粒砂が混じる。出土遺物はなかった。

ＳＰ 16　幅 50㎝、深さ７㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／１黄灰色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＰ 18　幅 67㎝、深さ４㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／１黄灰色極細粒砂混じり粘質シルトあった。出土遺物はなかった。

ＳＰ 19　幅 27㎝、深さ９㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／１黄灰色極細粒砂混じり粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＰ 20　幅 30㎝、深さ５㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／２暗灰黄色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＰ 21　幅 28㎝、深さ６㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／２暗灰黄色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＰ 22　幅 17㎝、深さ５㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／２暗灰黄色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

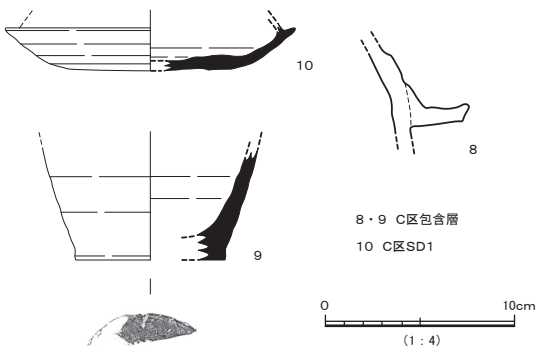
ＳＰ 23　幅 23㎝、深さ４㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／２暗灰黄色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＰ 24　幅 29㎝、深さ５㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／２暗灰黄色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＰ 25　幅 44㎝、深さ５㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／２暗灰黄色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＰ 26　幅 50㎝、深さ 12㎝を計り平面形は円形である。埋土は上下に２層に分かれる。① 2.5 Ｙ５／１黄灰色極細粒砂混じり粘質シルト② 2.5 Ｙ４／２暗灰黄色極細粒砂混じり粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＰ 27　幅 16㎝、深さ６㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／１黄灰色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。



第 27 図　Ｃ区出土遺物

ＳＰ 28　幅 39㎝、深さ 10㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／１黄灰色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＰ 29　幅 47㎝、深さ 12㎝を計り平面形は円形である。埋土は上下に２層に分かれる。① 2.5 Ｙ５／１黄灰色粘質シルト② 2.5 Ｙ４／１黄灰色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＰ 30　幅 28㎝、深さ 12㎝を計り平面形は

円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／２暗灰黄色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＰ 31　幅 18㎝、深さ７㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／１黄灰色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＰ 32　幅 24㎝、深さ６㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／１黄灰色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＰ 33　幅 41㎝、深さ６㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／２暗灰黄色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＰ 34　幅 28㎝、深さ 14㎝を計り平面形は円形である。埋土は上下に２層に分かれる。① 2.5 Ｙ５／２暗灰黄色粘質シルト② 2.5 Ｙ４／１黄灰色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＰ 35　幅 66㎝、深さ 10㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／１黄灰色極細粒砂混じり粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＰ 36　幅 23㎝、深さ９㎝を計り平面形は円形である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／２暗灰黄色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＰ 37　幅 66㎝、深さ 18㎝を計り平面形は円形である。埋土は上下に２層に分かれる。① 2.5 Ｙ５／２暗灰黄色粘質シルト② 2.5 Ｙ４／１黄灰色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

ＳＤ１　検出した幅 73㎝、深さ７㎝の溝である。埋土は１層で 2.5 Ｙ４／１黄灰色粘質シルトであった。出土遺物はなかった。

第２章　まとめ

これまでみてきたように松ケ本南遺跡の今次調査は、大半が後世の攪乱によって削平を受けていたため、遺構・遺物ともに情報量が少なく遺跡の全容を把握するには至らなかったが、以下、各調査区の概略を説明しまとめとすることにする。

まず、Ａ区では、２棟の掘立柱建物と思われる柱穴の並びを検出したが、いずれのピットからも遺物は出土せず詳細な時期は不明である。特にＳＢ２については、柱間が長いこと、検出した柱間が一定ではないことなど、積極的に掘立柱建物として評価するには躊躇する。

しかしながら、これらピットが他に何らかの建物を形作る構成をなさないのも確かであり、検出面上面が削平を受けたことにより、他のピットがなくなっていたものと考えたい。

Ａ区については、今次調査の中でも遺物量が極めて少ないため、ＳＤ１出土の須恵器坏蓋の時期のみで判断するには早急であるが、各遺構の埋土の状況からみれば、各遺構の所属時期にそれほど差異があるようには考えられず、各遺構の所属時期は概ねＳＤ１と同時期の７世紀後半から８世紀頃までのもと考えられる。

Ｂ区についてはＢ１．Ｂ２区と分けて調査をおこなったが、ここでは、まとめて概略を記す。まずＢ１区ＳＫ１やＳＫ２は出土した土器から弥生時代中期頃の所産であり、この調査区で検出した遺構の大半がこの時期のものと考えられるが、ＳＰ 29 から出土した黒色土器Ａ類椀の時期もあり推定の域を出ない。ただし、中条小学校遺跡あるいは東奈良遺跡でみられるような弥生時代の集落が、谷状地形を挟む当該地でまで展開していた可能性がある。しかし、遺構密度は先の遺跡ほどではなく、遺

物量にも大きな差異が認められる。したがって、継続して営まれた先の遺跡とは異なり、一時的に当該地まで集落が展開したものと考えられるが、こうした見解は、今後の調査成果に期待したい。

Ｃ区は、先述したＡ・Ｂ区とは異なり遺構面２面検出した。この要因としてＣ区の場所が既存工場の入り口付近で大きな建物がなく、建物基礎や建物解体に伴う削平を受けなかったことが第一に挙げられるが、当該地周辺の地形として北から南に標高が下がる傾向がある事も挙げられる。

先の調査区と同様、遺構から出土した遺物が少なく各遺構の所属時期は不明な点が多いが、上層遺構面の包含層にあたる⑥層から中世に帰属する遺物が出土しており、上層遺構面は中世段階の生活面として捉えられる。下層遺構面の時期として、下層遺構面の包含層に該当する⑦層より７世紀代の須恵器が出土しており、わずかな遺物から推察すれば下層の各遺構は当該期であると考えることができよう。

以上、推察が多い結語であるが、出土遺物や遺構残存度合が決して良好ではない状況の中で、中条小学校遺跡と隣接しつつも地形を分かつ当該地が、弥生から古墳時代にかけて連綿と営まれる中条小学校遺跡や東奈良遺跡の集落展開とは異なる様相である事が把握できたことは、今次調査の成果の１つと言えよう。

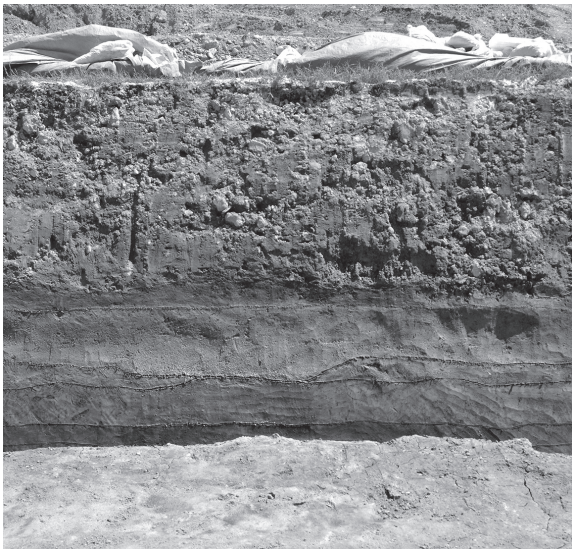
第１表　遺物観察表

挿図番号	地区	出土地	器種	器形	法量（cm）	残存	色調	胎土	調整	備　考
1	A区	SD1	須恵器	蓋	口径：10.0 器高：2.5	2/3	外・内：N7/灰白色 断：N6/灰色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ツマミ貼付時のナデ、回転ヘラケズリ、ロクロナデ 内面：ナデ、ロクロナデ	
2	B１区	ＳＫ１	弥生土器	台付甕	底径：6.7 器高：（9.6）	底部完形	外・断・内：2.5Y7/1灰白色	やや粗(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
3	B１区	ＳＫ１	弥生土器	壺か	底径：9.2 器高：（5.9）	底部完形	外・断・内：10YR5/2灰黄褐色	やや粗(φ3.5mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：ナデ 内面：ハケ後ナデ	
4	B１区	ＳＫ１	弥生土器	甕か	底径：9.0 器高：（14.5）	底部～体部1/5	外・内：2.5Y8/3淡黄色 断：N4/灰色	やや粗(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ハケ、ナデ 内面：ナデか	
5	B１区	ＳＫ１	弥生土器	甕か	底径：7.7 器高：（8.3）	底部完形	外・断：N5/灰色 内：2.5Y8/2灰白色	やや粗(φ3.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ハケ、ナデか 内面：ナデ	
6	B１区	ＳＫ２	弥生土器	高杯	底径：3.4 器高：（4.5）	杯部ほぼ完形	外・断・内：2.5Y8/2灰白色	密(φ6.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：ナデか	
7	B２区	ＳＰ29	黒色土器	椀	口径：15.6 底径：7.4 器高：5.6	1/4	外・断：10YR8/2灰白色 内：N3/暗灰色	密(φ1.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ヨコナデ、ナデ、貼付高台、ナデ 内面：ミガキ	
8	C区	包含層	瓦質土器	羽釜	器高：（4.9）	破片	外・断：10YR8/1灰白色 内：N4/灰色	密(φ1.0mm以下の長石、石英を含む)	外面：ナデ、鍔貼付時のナデ 内面：ナデ	
9	C区	包含層	須恵器	鉢	底径：7.8 器高：（5.9）	底部1/6	外：7.5YR4/1褐灰色 断：5YR6/1褐灰色 内：N7/灰白色	密(φ4.0mm以下の長石、チャートを含む)	外面：ロクロナデ、糸切り痕 内面：ロクロナデ	
10	C区	ＳＤ１	須恵器	杯身	底径：15.3 器高：（2.5）	1/4	外・断・内：N7/灰白色	密(φ1.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ロクロナデ、回転ヘラケズリ 内面：ロクロナデ、ナデ	

図版1　A・B・C区　土層断面

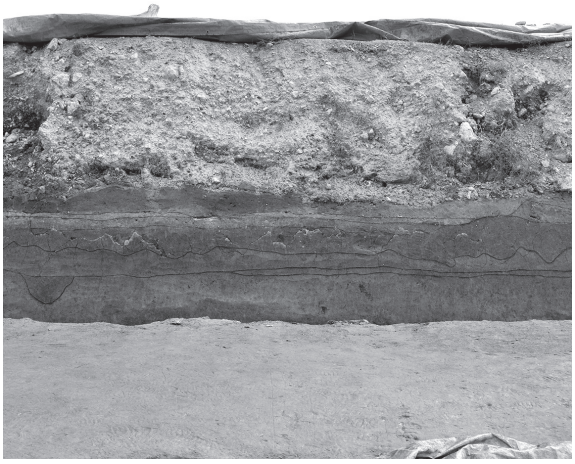
1．A区　東壁土層断面（西から）

2．B１区　南壁土層　断面（西から）



3．B１区　南壁土層　断面（北から）

1．B２区　東壁土層　断面（西から）



2．B２区　東壁土層　断面（西から）

2．C区　西壁土層断面（東から）

図版2　C区　土層断面　A区　遺構

1．C区　西壁土層断面（北東から）

2．C区　西壁土層断面（南東から）

1．A区　検出状況（東から）

2．A区　完掘状況（東から）

1．A区　完掘状況（南から）

2．A区　北東角調査区全景（北から）

1．B1区　北側検出状況（南から）

2．B1区　南側検出状況（西から）

1．B2区　完掘状況（南から）

2．B2区　検出状況（南から）

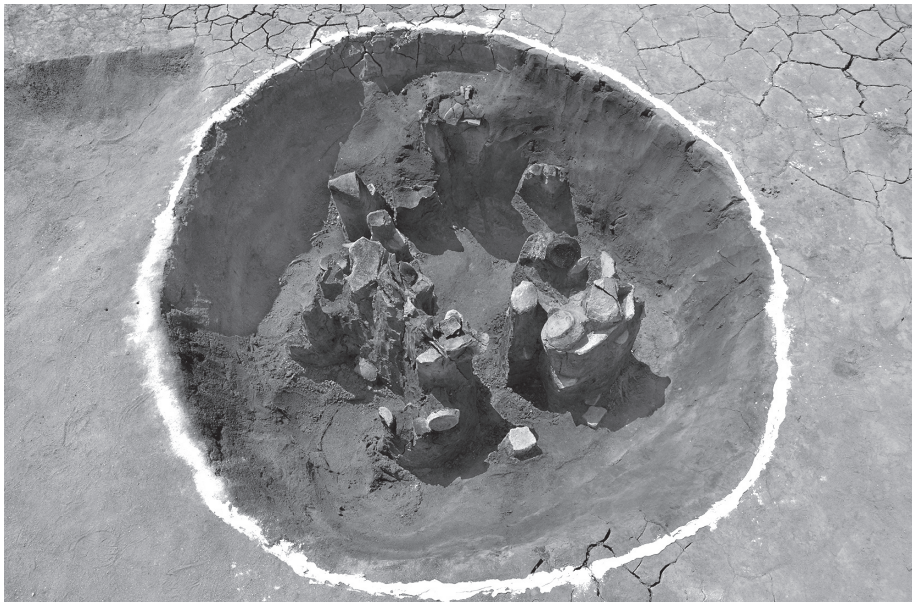
1．B２区　完掘状況（北から）

2．C区　第１面検出状況（北西から）

図版4　B1区　遺構

1．ＳＥ１土層断面
（南から）

2．ＳＫ１土層断面
（東から）

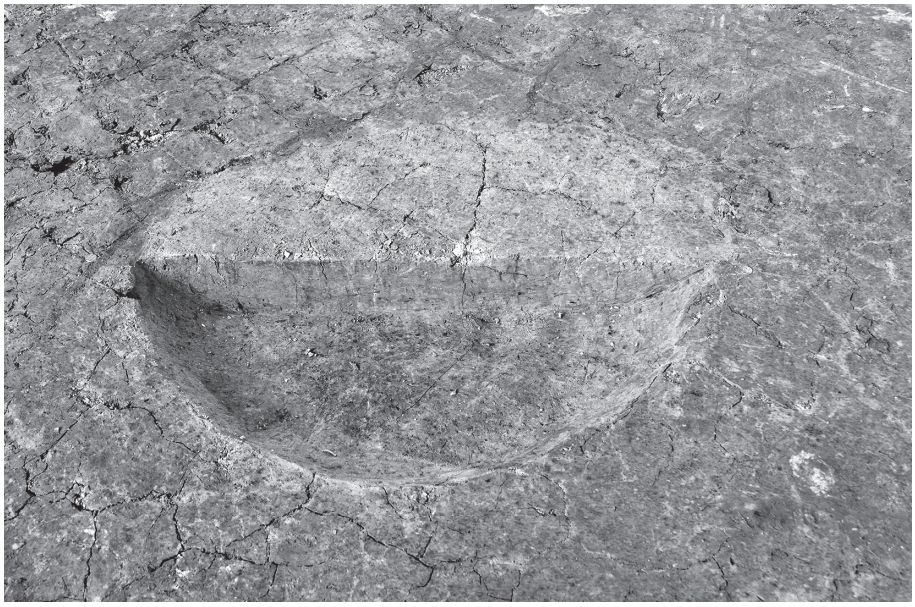


3．ＳＫ１完掘状況
（東から）

図版5　B1・B2区　遺構

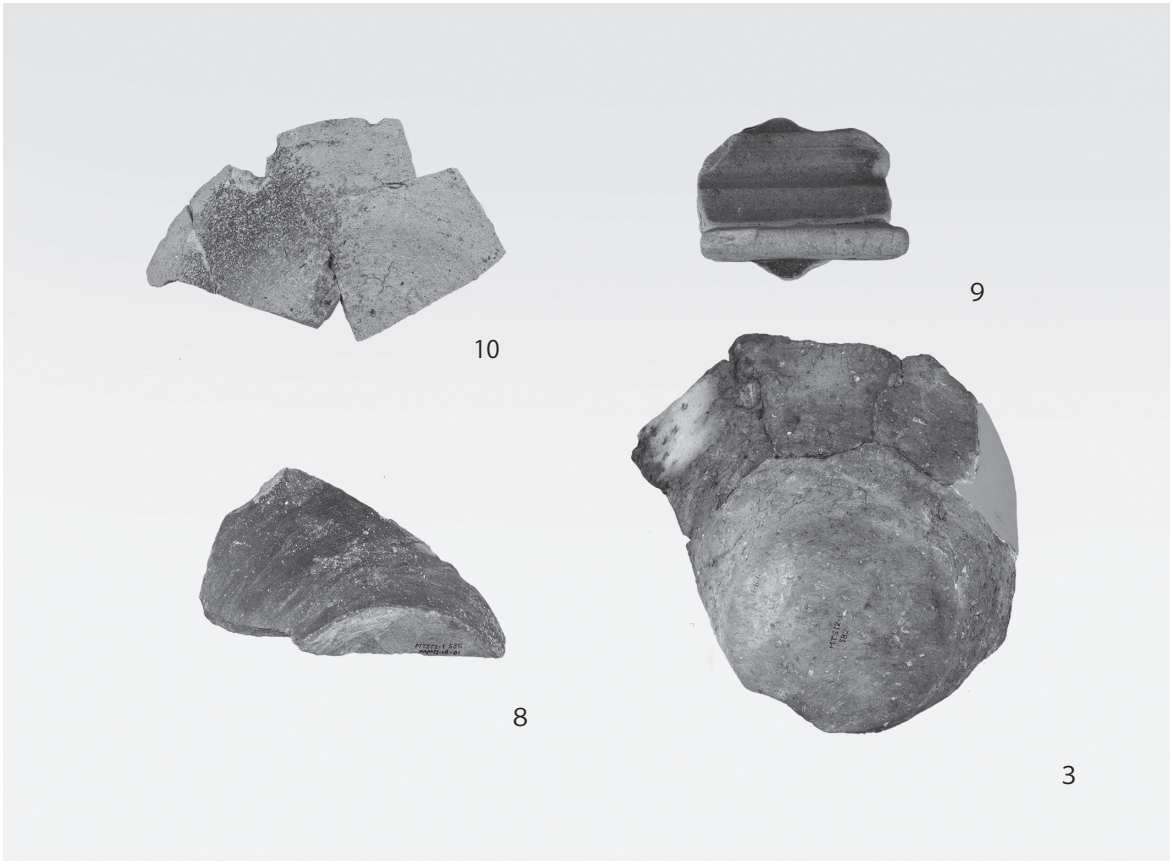
1．B1区　SK2
土層断面(南から)

2．B1区　SK2
遺物出土状況
(南から)



3．B2区　SP12
土層断面(南から)

図版6　出土遺物



1．B1区　SK1（3）、C区　包含層（8・9）、C区　SD1（10）

2．A区　SD1（1）、B1区　SK1（2・4・5）、B2区　SK2（6）、SP29（7）

報　告　書　抄　録

ふりがな	まつがもとみなみいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	松ケ本南遺跡発掘調査報告書
副書名	立命館大学大阪いばらきキャンパス建設に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	茨木市文化財資料集
シリーズ番号	第 65 集
編著者名	藤田徹也
編集機関	茨木市教育委員会
所在地	〒 567 － 8505　大阪府茨木市駅前三丁目 8 番 13 号
発行年月日	平成 27 年 10 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市　町　村 コード	遺跡番号	北　緯 °　′　″	東　経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
松ケ本南遺跡	大阪府 茨木市 岩倉町	27211	117	34° 48′ 33″	135° 33′ 34″	2012 6.1 ～ 2012 12.27	20,620	立命館大学大阪いばらきキャンパス建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松ケ本南遺跡	散布地	弥生時代中期 古代	土坑 溝	弥生土器 須恵器・黒色土器	

要　約	本書は立命館大学大阪いばらきキャンパス建設に伴う発掘調査の報告書である。 調査では、遺構の密度は低かったが、弥生時代中期の土坑や古代の溝などを検出した。 近接する中条小学校遺跡や東奈良遺跡とは遺跡の様相が異なることが分かった。

松 ケ 本 南 遺 跡
発 掘 調 査 報 告 書
茨木市文化財資料集　第 65 集
平成 27 年 10 月 31 日
編集　茨木市教育委員会
印刷　株式会社　西川印刷所